

ひがし うね わら

東畦原第1遺跡(一次調査)

Higasiunewara-1-1site

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書37

2006

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区全景

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道(都農～西都間)建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施してまいりました。本書は、その発掘調査報告書であります。

東畦原第1遺跡(一次調査)は、平成13・14年度にかけて発掘調査を行ないました。今回の調査では、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物を確認することができました。旧石器時代では、ナイフ形石器や角錐状石器、細石刃など、当時の狩猟に使われた道具が、縄文時代早期では、調理に使われた可能性のある集石遺構がみつかっています。これらは、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

ここに報告する内容が、学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、郷土を誇りに思う心情を育むとともに、埋蔵文化財の保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力をいただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成18年12月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例 言

- 1 本書は、平成13・14年度に実施した東九州自動車道(都農～西都間)建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団から委託を受けた宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測等の記録は、外山宏幸、大山博志、可見直典、松尾有年、藤木聰、日高敬子が行った。
- 4 石器実測は、一部を大成エンジニアリング株式会社に委託し、他は埋蔵文化財センターで整理作業員の補助を得て、外山宏幸が行った。
- 5 本書に使用した実測図等の著者は、外山宏幸が行なったほか整理作業員が補助した。
- 6 現地での写真は、外山宏幸、大山博志、可見直典、松尾有年が、出土遺物写真は松本茂が撮影した。
- 7 測量・空中写真・理化学的分析等は次の機関に委託した。
地形測量・グリッド杭設定：(株)福島測量、(株)エイユー技建
空中写真：九州航空株式会社、(株)スカイサーベイ
放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析・テフラ分析：(株)古環境研究所
- 8 本報告書に使用した記号は次のとおりである。
SI・・・・・疊群、集石遺構
- 9 本書に使用した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50,000の図をもとに、また、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1/1,000図をもとに作成した。
- 10 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北(G. N.)を基本とし、位置図等の一部に磁北(M. N.)を使用した。本地域における真北との偏差は5°5'である。
- 11 國土座標は、平成13年度に設置された東畦原第1遺跡発掘調査基準点「TK. 2」と「TK. 3」の

國土座標を基に設定している。但し、改訂前の旧平角直角座標系「日本測地系」である。

- 12 土層の色調については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 13 石材の同定については、松田清孝氏(県総合博物館)、赤崎広志の協力を得た。
- 14 本書の第1章(自然科学分析)は分析を委託した古環境研究所の報告である。
- 15 本書の執筆・編集は宮崎県埋蔵文化財センターの外山宏幸が行い、松本茂がこれを補助した。
- 16 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺物実測図の挿図の縮尺は次のとおりである。
 - ・ 基本的な縮尺……2/3
 - ・ 最大長が1cm未溝の石器……1/1
 - ・ 最大長が10cm以上の石器……1/2
- 2 遺物実測図以外の挿図縮尺は次のとおりである。
 - ・ 遺跡周辺図……1/2,000, 1/50,000
 - ・ 土層図……1/30
 - ・ 疊群実測図……1/30
 - ・ 遺物出土分布図……1/650以上を基本とし、これ以外のものもある。
- 3 石器計測表及び観察表の計測値は、資料を囲んだ立方体の長さ、幅、厚さである。長さの単位はcm、重さの単位はgである。
- 4 石器実測図の中の記号・表示は以下のものを示す。
 - ・ 石器の節理面は一点鎖線で表示する。
 - ・ 微細剥離が確認された部分は|—|の記号を用いてその範囲を示す。
 - ・ 「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に||の記号を示す。
 - ・ 敷打痕はドットと曲線の組み合わせで、磨痕は点線で範囲を囲って表現している。

5 東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘 調査の地層については、次に示す統一略称を用いる。

頭に冠するM:宮崎平野を意味する識別記号(M
L:ローム層 MB:黒色土層)

東九州自動車道(西都～都農間)関連の発掘調査における宮崎平野の基本層序

No.	略 称	層 名	年 代	特 徴
1		表 土		
2	クロボク	黒色土		
3	Kr-Th	高原スコリア	AD 1235	本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる。
4	クロボク			
5	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い。
6	MB 0	黒褐色ローム		
7	ML 1	暗褐色ローム		
8		桜島薩摩(Sz-S)	11ka	バミスは細かく、シャーベット状のブロックとなっている。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9		褐色ローム		
10	Kr-Kb		15ka	小丸川以北では識別が難しくなる。
				<u>深年Ⅱ段丘堆積物</u>
11	MB 1	暗褐色ローム		
12	ML 2			径2～3cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。ATの二次堆積や、土壤化、腐植などの影響でAT本体より色が暗いと思われる。
13	AT	姶良Tn	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石(姶良大隅:A-O s)が見られる。
14	MB 2	暗褐色ローム		
15	A-Fm	姶良深港	26.5ka	AT直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス(A-Fm,A-Ot)が密な部分が見られることがある。
16	A-Ot	姶良大塚	30ka	
17	MB 3	暗褐色ローム		
18	ML 3	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	Kr-Aw	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリア、ラビリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリアを主体とする。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。
21	ML 4	明褐色ローム		
22	Kr-Iw	イワオコシ	50ka	赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。
				<u>雷野段丘堆積物</u>
23		明黄褐色ローム		雷野段丘堆積物
24		キンキラローム		黄～淡黄色の粘りのあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸(A-I w)の風化層。
25	A-Iw	姶良岩戸	60ka	粗粒砂大～径3mmの黄色粗石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒。
				<u>阿蘇段丘堆積物</u>
26	Aso-4	阿蘇4	86-90ka	阿蘇4火碎流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火碎流堆積物。風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。

*年代は、奥野充・福島大介・小林哲夫「南九州のテフロクロノロジー」『人類史研究』12(2000)による。未較正。

本文目次

第Ⅰ章はじめに	1	第10図 調査区中央部南北方向土層断面図	13
第1節 調査に至る経緯	1	第11図 調査区中央部北東方向土層断面図	14
第2節 調査の組織	1	第12図 調査区中央部東西方向土層断面図	15
第Ⅱ章 遺跡の環境	2	第13図 調査区西部北西方向上層断面図	15
第1節 地理的環境	2	第14図 調査区西部南北方向土層断面図	15
第2節 歴史的環境	2	第15図 調査区西部南北方向土層断面図	16
第Ⅲ章 調査の経過と方法	3	第16図 調査区南西部東西方向土層断面図	16
第1節 確認調査の概要	5	第17図 旧石器時代第Ⅰ文化層構造・遺物分布図	19
第2節 発掘調査の方法と経過	6	第18図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石材別疊分布図	20
第3節 整理作業及び報告書作成	6	第19図 旧石器時代第Ⅰ文化層 赤度別疊分布図	21
第Ⅳ章 調査の記録	8	第20図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 1 実測図	22
第1節 調査の概要	8	第21図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 2 実測図	23
第2節 基本層序	9	第22図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 3 実測図	24
第3節 旧石器時代の遺構と遺物	17	第23図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 4 実測図	25
1 文化層の設定	17	第24図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 5 実測図	26
2 碓群の設定	17	第25図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 6 実測図	27
3 旧石器時代第Ⅰ文化層の遺構と遺物	17	第26図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 7 実測図	28
4 旧石器時代第Ⅱ文化層の遺構と遺物	59	第27図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 8 実測図	29
5 旧石器時代第Ⅲ文化層の遺構と遺物	77	第28図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 9 実測図	30
第4節 繩文時代早期の遺構と遺物	96	第29図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 10 実測図	31
1 概要	96	第30図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 11 実測図	32
2 遺構	96	第31図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 12 実測図	33
3 遺物	96	第32図 旧石器時代第Ⅰ文化層 器種別遺物分布図	34
第Ⅴ章 自然科学分析	99	第33図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石材別遺物分布図	35
第Ⅵ章 おわりに	106	第34図 旧石器時代第Ⅰ文化層 ホルンフェルス製石器分布図 1	37
		第35図 旧石器時代第Ⅰ文化層 ホルンフェルス製石器分布図 2	38
		第36図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 1	39
		第37図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 2	40
		第38図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 3	41
		第39図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 4	42
		第40図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 5	43
		第41図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 6	44
		第42図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 7	45
		第43図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 8	46
		第44図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図 9	47
		第45図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 1	48
		第46図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第47図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 2	
第2図 周辺地形図と調査区	4	第48図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 3	
第3図 確認調査トレチ配置図および主要トレチの土層柱状図	7	第49図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 4	
第4図 調査対象区域およびグリッド配置図	8	第50図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 5	
第5図 土層断面実測図作成位置図	10	第51図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 6	
第6図 調査区北東部東西方向土層断面図	10	第52図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 7	
第7図 調査区北部南北方向上層断面図	11	第53図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 8	
第8図 調査区中央部東西方向土層断面図	12	第54図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 9	
第9図 調査区中央部北東方向土層断面図	12	第55図 旧石器時代第Ⅰ文化層 頁岩製石器分布図 10	

2	49	第73図	旧石器時代第Ⅲ文化層 遺構・遺物分布図	79
第47図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図10…50	第74図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石材別疊分布図…	80
第48図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図11…51	第75図	旧石器時代第Ⅲ文化層 赤化度別疊分布図…	81
第49図	旧石器時代第Ⅰ文化層 流紋岩・黒曜石・チャート製石器分布図…52	第76図	旧石器時代第Ⅲ文化層 S I 17実測図…82	82
第50図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図12…53	第77図	旧石器時代第Ⅲ文化層 S I 18実測図…82	83
第51図	旧石器時代第Ⅰ文化層 砂岩・尾鈴山酸性岩類製石器分布図…54	第78図	旧石器時代第Ⅲ文化層 S I 19実測図…83	83
第52図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図13…55	第79図	旧石器時代第Ⅲ文化層 S I 20疊分布図…	83
第53図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図14…56	第80図	旧石器時代第Ⅲ文化層 器種別遺物分布図…	84
第54図	旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図15…57	第81図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石材別遺物分布図…	85
第55図	旧石器時代第Ⅱ文化層 遺構・遺物分布図…61	第82図	旧石器時代第Ⅲ文化層 貝岩製石器分布図…	86
第56図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石材別疊分布図…62	第83図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図1…87	87
第57図	旧石器時代第Ⅱ文化層 赤化度別疊分布図…63	第84図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図2…88	88
第58図	旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 13実測図…64	第85図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図3…89	89
第59図	旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 14実測図…64	第86図	旧石器時代第Ⅲ文化層 流紋岩製造物分布図…90	90
第60図	旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 15実測図…65	第87図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図4…91	91
第61図	旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 16実測図…65	第88図	旧石器時代第Ⅲ文化層 ホルンフェルス製遺物分布図…92	92
第62図	旧石器時代第Ⅱ文化層 器種別遺物分布図…66	第89図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図5…93	93
第63図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石材別遺物分布図…67	第90図	旧石器時代第Ⅲ文化層 黒曜石・砂岩・チャート製造物分布図…94	94
第64図	旧石器時代第Ⅱ文化層 ホルンフェルス製石器分布図1…68	第91図	旧石器時代第Ⅲ文化層 石器実測図6…95	95
第65図	旧石器時代第Ⅱ文化層 ホルンフェルス製石器分布図2…69	第92図	縄文時代早期 遺構・遺物分布図…97	97
第66図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石器実測図1…70	第93図	縄文時代早期 石器実測図…97	97
第67図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石器実測図2…71	第94図	縄文時代早期 S I 21実測図…98	98
第68図	旧石器時代第Ⅱ文化層 貝岩製石器分布図1…72			
第69図	旧石器時代第Ⅱ文化層 貝岩製石器分布図2…73			
第70図	旧石器時代第Ⅱ文化層 流紋岩・黒曜石・チャート・砂岩・尾鈴山酸性岩類製石器分布図…74			
第71図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石器実測図3…75			
第72図	旧石器時代第Ⅱ文化層 石器実測図4…76			

表 目 次

第1表	確認調査の基本層序…	5
第2表	確認調査検出の遺構・遺物…	5
第3表	文化層毎の主な遺構・遺物…	8
第4表	基本層序…	9
第5表	旧石器時代第Ⅰ文化層の石器・石材組成	

.....	17	
第6表 旧石器時代第Ⅱ文化層の石器・石材組成	18 第Ⅲ文化層の礫群①(S I 15)	123
.....	19 第Ⅲ文化層の礫群①(S I 17)	123
.....	20 第Ⅲ文化層の礫群②(S I 18近景)	123
第7表 旧石器時代第Ⅲ文化層の石器・石材組成	21 基本層序	123
.....	22 第Ⅰ文化層の石器① 接合資料1	124
第8表 縄文時代早期の石材・石器組成	23 第Ⅰ文化層の石器② 接合資料3	124
.....	24 第Ⅰ文化層の石器③ 接合資料4	125
第9表 縄文時代早期の集石遺構成礫の属性	25 第Ⅰ文化層の石器④ 磚器	125
第10表 調査区東壁試料の火山ガラス比分析結果	26 第Ⅰ文化層の石器⑤ 磚器・石核	126
.....	27 第Ⅰ文化層の石器⑥ 石核・測片	126
第11表 調査区東壁試料の屈折率測定結果	28 第Ⅰ文化層の石器⑦ 石核・測片・敲石	127
.....	29 第Ⅱ文化層の石器① 接合資料11~13	127
第12表 放射性炭素年代測定の試料と方法	30 第Ⅱ文化層の石器② 磚器・石核	128
.....	31 第Ⅱ文化層の石器③ 石核・剥片・ナイフ形石	128
第13表 放射性炭素年代の測定結果	器など	128
添付資料1 東畠原第1遺跡(一次調査) 遺物計測 表(1)~(9)	32 第Ⅱ文化層の石器④ 敲石・台石	129
添付資料2 東畠原第1遺跡(一次調査) 紫群属性 表(1)~(5)	33 第Ⅲ文化層の石器① 接合資料14	129
.....	34 第Ⅲ文化層の石器② ナイフ形石器・角錐状石	130
.....	器	130
.....	35 第Ⅲ文化層の石器③ 石核・剥片・細石刃・敲石・ 台石(縮尺不同)	130
.....	36 縄文時代早期の集石遺構④(S I 21)	131
.....	37 縄文時代早期の集石遺構⑤(S I 21検出状態)	131
.....	38 縄文時代早期の石器	131

図版目次

卷頭図版	121
調査区全景	121
.....	121	
卷末図版	121
1 遺跡全景(北東から)	121	
2 第Ⅰ文化層の礫群①(S I 1)	121	
3 第Ⅰ文化層の礫群②(S I 1近景)	121	
4 第Ⅰ文化層の礫群③(S I 2)	121	
5 第Ⅰ文化層の礫群④(S I 1・2)	121	
6 第Ⅰ文化層の礫群⑤(S I 3)	122	
7 第Ⅰ文化層の礫群⑥(S I 4)	122	
8 第Ⅰ文化層の礫群⑦(S I 5)	122	
9 第Ⅰ文化層の礫群⑧(S I 5近景)	122	
10 第Ⅰ文化層の礫群⑨(S I 6)	122	
11 第Ⅰ文化層の礫群⑩(S I 7)	122	
12 第Ⅰ文化層の礫群⑪(S I 6・7)	122	
13 第Ⅰ文化層の礫群⑫(S I 4~7)	122	
14 第Ⅲ文化層の礫群⑬(S I 8~10)	123	
15 第Ⅲ文化層の礫群⑭(S I 9・11・12)	123	
16 第Ⅲ文化層の礫群⑮(S I 13)	123	
17 第Ⅲ文化層の礫群⑯(S I 14)	123	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は、平成元年2月に基本計画が決定し、それに基づき、宮崎県教育委員会では、予想されるルート周辺の分布調査を行い多くの遺跡が確認されている。その中の一区間である都農～西都間については、平成9年10月に施行命令が出され、それに伴い平成10年度に県教育委員会が路線上の分布調査を行った結果、計79箇所に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで県教育委員会では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け、建設工事で影響を受ける遺跡の発掘調査を実施することとなった。

東畦原第1遺跡（一次調査）は、平成13年8月1日から9月10日（実調査日数19日）にかけて確認調査を行った。対象面積を約6,400m²とし、25箇所のトレンチ（約700m²）を設定した。その結果、A区ではKr-Kbより上位の層は削平されていたが、AT下位のMB 2及びMB 3から礎群と石器が、ML 2から石器が確認された。B区は、MB 3まで削平され構造・遺物は確認されなかった。

これらの確認調査の結果をもとに、調査対象面積を約5,000m²として、平成13年度は11月1日から3月29日（実調査日数89日）まで、平成14度は4月1日から9月30日（実調査日数107日）にかけて、旧石器時代を中心とした本調査を実施した。

なお、一次調査に続き、二～四次調査が平成14・15年度に実施され、旧石器時代を中心とした遺物・遺構がそれぞれ確認されている。

第2節 調査の組織

東畦原第1遺跡（一次調査）の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛（平成13年度）

米良 弘康（平成14・15年度）

宮園 淳一（平成16・17年度）

清野 勉（平成18年度）

副 所 長 加藤 吾郎（平成18年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成13～18年度）

副所長兼総務課長

菊地 茂仁（平成13年度）

大瀬 和博（平成14～16年度）

総務課長 宮城 尊（平成17・18年度）

調査第一課長 面高 哲郎（平成13年度）

児玉 章則（平成14・15年度）

高山 富雄（平成16～18年度）

主幹兼総務係長 石川 恵史（平成15～17年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信（平成18年度）

総務係長 亀井 雅子（平成13年度）

野邊 文博（平成14年度）

調査第一係長 谷口 武範（平成13～16年度）

主幹兼調査第一係長

長津 宗重（平成17年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津 宗重（平成18年度）

調査第二係長 長津 宗重（平成13～16年度）

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹（平成17年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成18年度）

主査(調査・監査担当) 外山 宏幸（平成13～15年度）

主査(調査担当) 大山 博志（平成13～14年度）

調査員(嘱託) 可児 直典（平成14年度）

松尾 有年（平成14年度）

調査指導・協力（敬称略）

小畠 弘己（熊本大学）

田崎 博之（愛媛大学）

加藤 真二（文化庁）

橋 昌信（別府大学）

佐藤 宏之（東京大学）

長岡 信治（長崎大学）

松田 清孝（宮崎県総合博物館）

調査協力 一つ瀬川土地改良区

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

東畦原第1遺跡は、宮崎県児湯郡新富町大字新田字下追口に所在する。新富町は、宮崎平野の北部一角を占める児湯郡に属し、九州山地を源とする一つ瀬川が南流から東流へと大きく湾曲する流域左岸の沖積平野と、標高70m～90mの台地面にかけて町域を有する。町域の大きな割合を占める洪積台地は、宮崎平野に広がる平坦地の顯著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海拔約120m）、三財原面（海拔約90m）、新田原面（海拔約70m）の3つに分けられる。沖積平野部は、この洪積台地を大きく東西に開して、ほぼ東流する鬼付女川によって形成された急峻な谷の底部と、一つ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の4～5つの砂丘面に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。また、本町は、北に高鍋町、西に一つ瀬川を界し西都市、南に同じく一つ瀬川を界して佐土原町と接しており、東に日向灘を望む位置にある。

本遺跡は、三財原台地上に位置する（第1図）。標高は約85～90mで、南西方向に緩やかに下る傾斜地上に立地する。一次調査区は、耕地整理の際に削平して造成され、蕪摩芋や蕓たばこを主作とする畑地であった。調査の結果、調査区は北東部と南西部に小さな谷が入る尾根上の地形であることがわかった。なお、本遺跡は調査を一～四次に分けて調査を行った。二～四次調査区は、本調査区の北東側にそれぞれ隣接している（第2図）。

第2節 歴史的環境

本書で報告する東畦原第1遺跡（一次調査区）は、調査の結果、後期旧石器時代と縄文時代早期の遺構・遺物が確認されている。そこで本節では、同時期と推察される、新富町を中心とする周辺の遺跡について概観する。

新富町内の旧石器時代に相当する人類の足跡は、新田原台地の北西端畦原（新富町大字新田字畦原）

で大野寅夫氏（西都市）がいわゆる「畦原型細石核」を表面採集されていて、その存在を知ることができる。以前に発掘調査された旧石器時代の遺跡は4箇所と少なく、いずれもK-Ah層下から集石遺構とともに遺物が出土した例が多い。町内最古の例としては滝水遺跡で出土したナイフ形石器があり、その他の遺跡では細石刃石器群が多い。

東九州自動車道（都農～西都間）関連では、多くの旧石器時代の遺跡が発掘調査され、資料数も増加している。音明寺第1・音明寺第2・東畦原第2・西畦原第1・西畦原第2・上新開・勘人寺・永牟田第1・尾小原の各遺跡でその成果が報告されている。Kr-Kbを含む層で、陥し穴や縄群、角錐状石器、台形石器などが、AT下位のMB2～MB3から縄群やナイフ形石器、敲石、剥片、石核などが多くの遺跡で確認され、新富町周辺における後期旧石器時代の様子が明らかになりつつある。

縄文時代の代表的な遺跡としては、新田原台地の西南端（春日地区）に位置する瀬戸口遺跡がある。ここは、縄文時代早期を主体とする集石遺構を中心に営まれたもので、特に東九州系の押型文土器と南九州系の貝殻条痕文土器の出土が注目されている。また、細石刃石器群を伴う集石遺構や磨研土器を伴う溝状遺構が確認されていることから、旧石器時代から縄文時代の長期間にわたって人間の生活が営まれたことが窺える。そのほかに、大字日置字藤掛、同字新山、同字原口、大字新田字向原、同字一丁田、同字音明寺、同字丸尾などで縄文土器が出土している。また集石遺構は、藤掛・西牧・中尾・七又木・銀代ヶ迫の各遺跡でも確認されている。

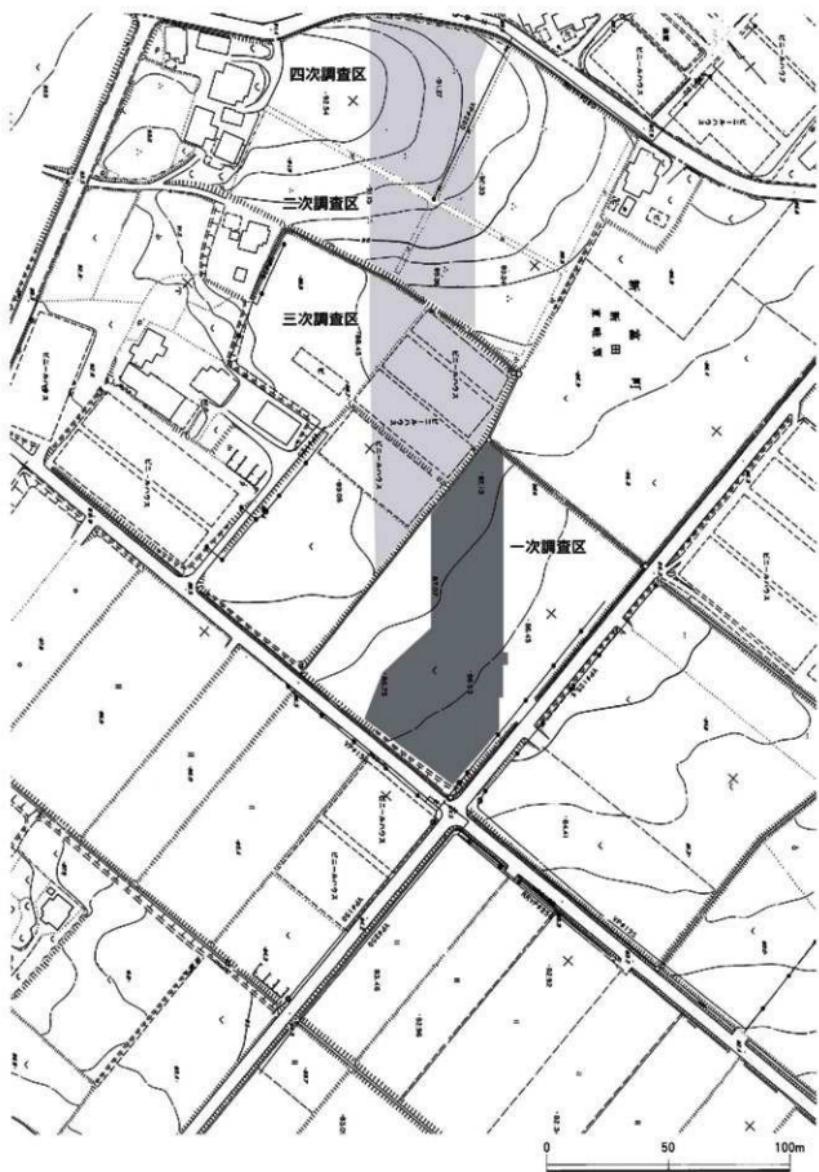
東九州自動車道（都農～西都間）関連では、音明寺第1・音明寺第2・東畦原第2・西畦原第2・尾小原・向原第1の各遺跡で、K-Ah下位のMB0～ML1から土器や石器などの遺物が、また集石遺構などの遺構が確認され、その成果が報告されつつあるところである。



- | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|
| 1 東畦原第1遺跡 | 2 唐木戸第3遺跡 | 3 唐木戸第4遺跡 | 4 小並第1遺跡 |
| 5 牧内第1遺跡 | 6 牧内第2遺跡 | 7 音明寺第1遺跡 | 8 音明寺第2遺跡 |
| 9 東畦原第2遺跡 | 10 東畦原第3遺跡 | 11 西畦原第1遺跡 | 12 西畦原第2遺跡 |
| 13 上新開遺跡 | 14 勝大寺遺跡 | 15 永幸田第1遺跡 | 16 尾小原遺跡 |
| 17 向原第1遺跡 | 18 藤山第2遺跡 | 19 宮ノ東遺跡 | 20 潟戸口遺跡 |
| 21 銀代ヶ迫遺跡 | 22 七又木遺跡 | 23 潟水遺跡 | 24 糜掛遺跡 |

(1~19は東九州自動車道建設に伴う調査、20~24は新富町による調査)

第1図 遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)



第2図 周辺地形図と調査区 ($S=1/20,000$)

第Ⅲ章

調査の経過と方法

第1節 確認調査の概要

東畦原第1遺跡（一次調査）の確認調査は、平成13年8月1日から9月10日にかけて、2名の調査員と11名の発掘作業員で行った。実調査日数は19日である。

調査区は道路を挟んで北側をA区、南側をB区に分けた。合計の対象面積は約6,400m²である。両区とも、重機を使用して表土（耕作土）を除去した後、人力で掘削・精査を行った。トレーニングの大きさは2m×2mのを基本として、遺構及び遺物の拡がりが予想されたところは4m×4mに拡大していった。

A・B両区で合計25箇所のトレーニング（約700m²）を設定した（第3図）。

A区では、調査の結果Kr-Kbより上位の層は大部分が削平されていることがわかった。北東部と南西部の緩やかな斜面にはML 2が残存しており、礫片や赤化した礫を含む礫群等を検出した。また、A区の北西部の一部を除く大部分でAT下位のMB 2及びMB 3を確認し、両層から剥片、石核、敲石、礫群等をそれぞれ検出した。MB 3より下位の層はKr-Iwまで良好に堆積していることを確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

B区では、ATを含む上位の層は削平され、MB 2及びMB 3まで擾乱されていることを確認した。下位の層の残存状況は良好で、ML 3・Kr-Aw・ML 4まで掘り下げたが、遺物・遺構は確認されなかった。また湧水を確認したため、ML 4より下位の層の調査は断念した。

以上の確認調査の結果から、本調査の対象区はA区に限定し、対象面積を約5,000m²とすることとした。主な遺物包含層は、下層から順にMB 3、MB 2及びML 2とした。したがって、後期旧石器時代を主な対象として、平成13年11月1日から本調査を実施することになった。なお、削平と擾乱の影響の大きいB区（約680m²）は調査の対象から除外することと

した。

第1表 確認調査の基本層序

層序	土色	東九州基本層序
I 層	表土	
II 層	擾乱土	
III 層	黄褐色土	M L 2
IV 层	黄橙色土	A T
V a 层	暗褐色土	M B 2
V b 层	褐色土	M B 3
VI 层	明褐色土	
VII 层	赤褐色土	M L 3
VIII 层	明赤褐色土	Kr - Aw
IX 层	明褐色土	M L 4
X 层	明赤褐色土	Kr - I w
XI 层	明黄色土	

第2表 確認調査検出の遺構・遺物

T No	遺構・遺物	東九州基本層序
T 2	剥片	MB 2
T 6 北	礫	MB 3
T 6 南	礫 礫群、敲石	MB 2 MB 3
T 7 北	礫	MB 3
T 16 南	礫	MB 2
T 19 北	剥片、石核、礫	MB 2
T 19 中	剥片、礫	MB 2
T 19 南	剥片、赤化礫	ML 2
T 20 中	赤化礫	ML 2
T 20 南	剥片、赤化礫	ML 2
T 21 南	集石	ML 2
T 22 南	礫	ML 2
T 23	赤化礫	ML 2

第2節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方法

本調査にあたって、約5,000m²の調査区に国土座標に準じて東から西にA～L、北から南に1～8の10m×10mのグリッドを設定した。調査は基本的に10m四方のグリッド間の北西25%（1 / 4区域）から精査を始めて、遺構・遺物を確認しながら順次50%・75%・100%と範囲を拡大していくという方法で行なった。

確認調査で遺構・遺物が確認されたML 2・MB 2・MB 3の順に、各層とも原則として100%の調査を行った。Kr-Aw以下の層については、25%の調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

2 調査の経過

（1）調査の経過

- ① 表土剥ぎ（重機・人力）
- ② グリッド杭の設置
- ③ ML 2の調査
 - ・100%の調査を実施。
 - ・遺構・遺物を確認。
- ④ AT層の除去（重機・人力）
- ⑤ MB 2の調査
 - ・100%の調査を実施。
 - ・遺構・遺物を確認。
- ⑥ MB 3の調査
 - ・100%の調査を実施。
 - ・遺構・遺物を確認。
- ⑦ 下位層の調査
 - ・25%の調査を実施。
 - ・遺構・遺物を確認せず。
- ⑧ 空中写真撮影の実施
 - ・調査区遠景やMB 3上面検出の疊群検出状況等を撮影。
- ⑨ 自然科学分析の実施
 - ・テフラ分析、植物珪酸体分析、C14年代測定を実施。
- ⑩ 調査区の埋め戻し（重機）

3 現地説明会の実施

平成14年5月11日（土）に現地説明会を実施した。

県内を中心に約160名の参加があり、当日は実際に発掘調査も行った。参加者は調査の様子や、遺構・遺物がどの地層からどのような状況で検出されたかを、説明を聞きながら巡回した。また、石器製作の体験や遺物の見学、スライド鑑賞等も行った。参加者は25,000年以上前の地層に触れたり、石を割る体験などをして、アンケートでは「昔の人たちがどれほど苦労していたか、頭を働かせていたか、しみじみわかる。」などの感想が寄せられた。

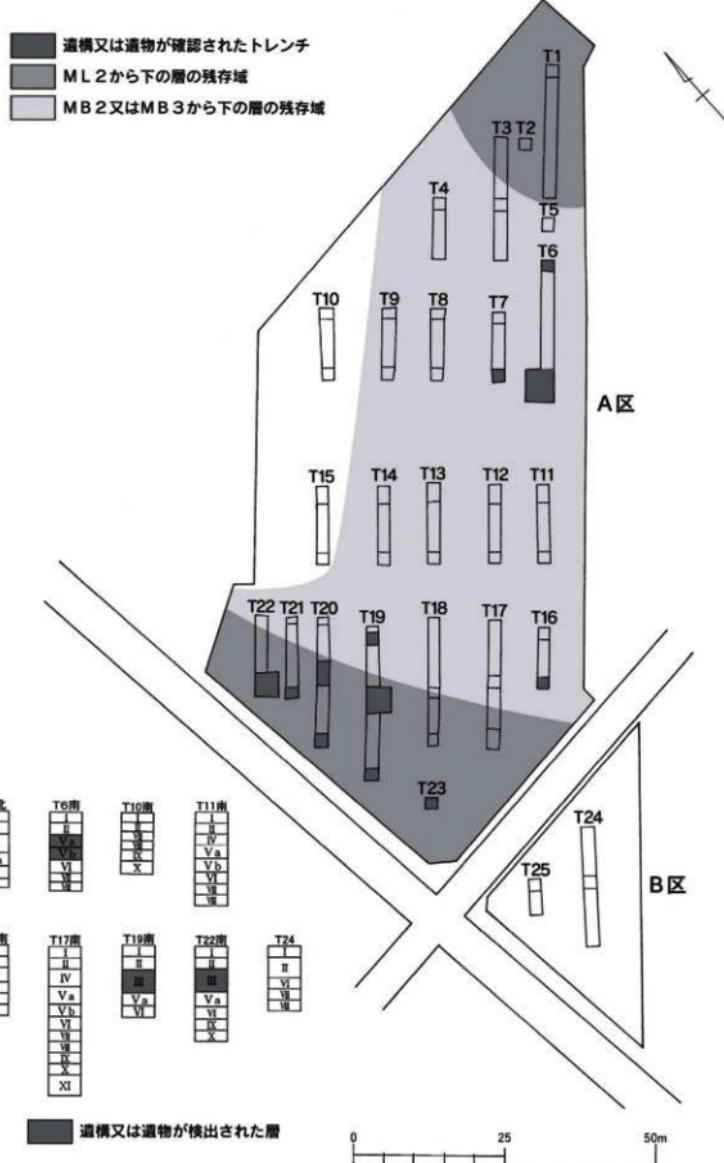
第3節 整理作業及び報告書作成

本遺跡で出土した遺物は、礫と石器である。基本的に、礫は東畦原整理作業事務所で、石器は宮崎県埋蔵文化財センター本館で、それぞれ整理作業を行った。

礫の整理作業は、平成14年10月1日から15年6月26日まで行った。3名の整理作業員で水洗い、注記、計測、属性記録、接合等の作業を行った。石器についても、水洗い、注記は先行して東畦原整理作業事務所で行った。

本館での石器整理作業は、平成15年5月6日から10月31日まで行った。3名の整理作業員で接合、計測、石材分類、実測、トレース等の作業を行った。なお、石器のうち、接合資料を含む125点は、大成エンジニアリング株式会社に実測及びトレースを委託した。

報告書作成については、本文作成、レイアウト、写真撮影、図版作成等の作業を平成16年3月まで埋蔵文化財センター本館で行った。



第3図 確認調査トレンチ配置図 (S = 1/800) および主要トレンチの土層柱状図

第Ⅳ章 調査の記録

第1節 調査の概要

確認調査の結果、本遺跡の北西部(約750m²)はMB3まで削平又は攪乱されていることがわかった。そのためこの区域は本調査の対象から除外した。またほぼ全域において、Kr-Kbから上位は削平されていたため、主に後期旧石器時代の調査を行った。

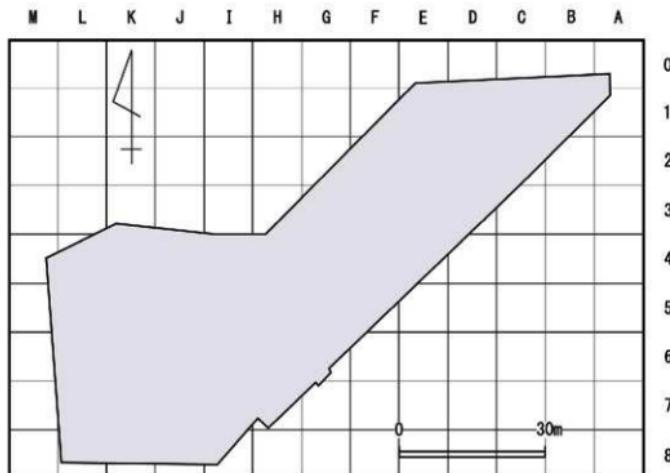
各層で確認された主な遺構・遺物を第3表に示した。調査区のほぼ全域にわたってML2及びMB2・3からは、計20基の礫群とナイフ形石器やスクレイバー等の石器類が検出された。礫群は尾鈴山酸性岩類や砂岩、頁岩、ホルンフェルス等を主とし、尾鈴山酸性岩類や砂岩の一部には赤化礫も認められた。直径は約5~15mほどで、ほとんどは密集度が低く散漫に広がるものである。比較的大きめで完形の円礫~亜角礫で構成されていた。石器類は、頁岩や砂岩、ホルンフェルスを主石材と

第3表 文化層毎の主な遺構・遺物

時代	層位	主な遺構・遺物
縄文時代早期	ML1	集石遺構1基、石礫、剥片
旧石器時代 第Ⅲ文化層	ML2	礫群4基、角錐状石器、ナイフ形石器、スクレイバー、二次加工剥片、石核、敲石等
後期旧石器時代 第Ⅱ文化層	MB2	礫群4基、ナイフ形石器、スクレイバー、二次加工剥片、石核、礫器、敲石、台石等
後期旧石器時代 第Ⅰ文化層	MB3	礫群12基、ナイフ形石器、スクレイバー、二次加工剥片、石核等

し、その大半は礫群と重なって出土している。

調査区西部の谷に向って下がる緩斜面では、集石1基が検出された。集石遺構を構成する礫は砂岩が大部分を占め、下部には直径約15~20cmの礫を配していた。埋土中には炭化物が含まれ、周辺からは黒曜石製の石礫、頁岩製の剥片等が出土した。



第4図 調査対象区域およびグリッド配置図 (S = 1/1,000)

第2節 基本層序

本遺跡の基本的な土層の層序を東九州自動車道（都農～西都間）関連の基本層序に照らすと第4表のとおりである。

I・II a・III b層については調査区南西部の緩斜面のごく一部のみで確認された。縄文時代早期の集石遺構1基が検出され、その掘り込み面は削平されていたが、集石遺構の形態や遺物から同期のものと推定され、II b層を掘り込んで形成されたと判断した。

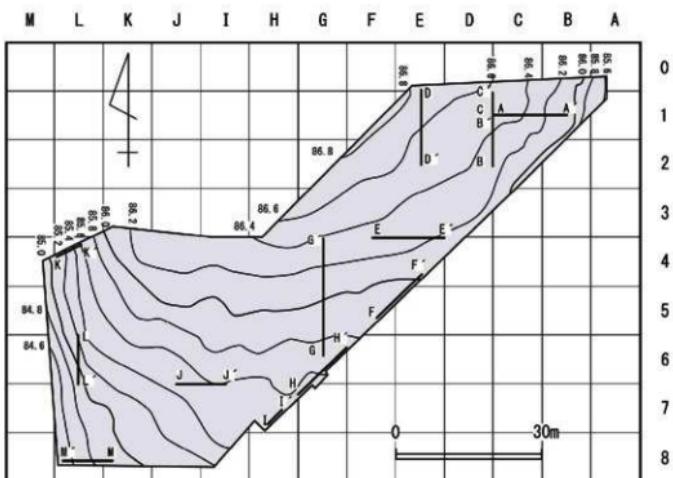
III層は調査区の北東部及び南西部の緩斜面に堆積し、礫群等が確認されている。

V a・V b・VI層は調査区のほぼ全域に堆積しており、礫群等が確認されているが、緩やかな斜面の下方に向かうほど残存状況が悪くなる。

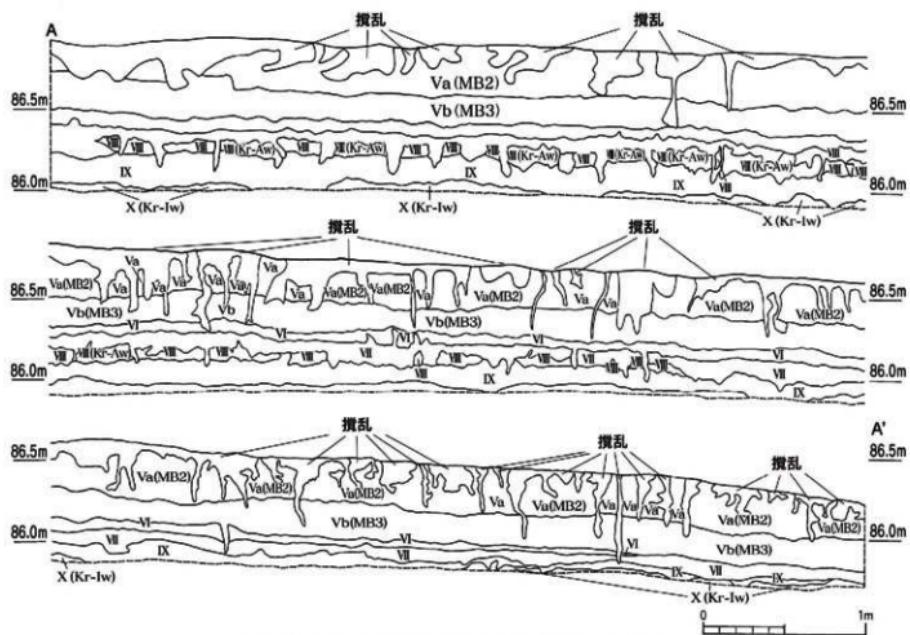
VII～X層は遺構・遺物は確認されていないが、斜面を除いて堆積状況はほぼ良好である。第X層下位では、粘質で水分が多く、大小の礫を多く含む。

第4表 基本層序

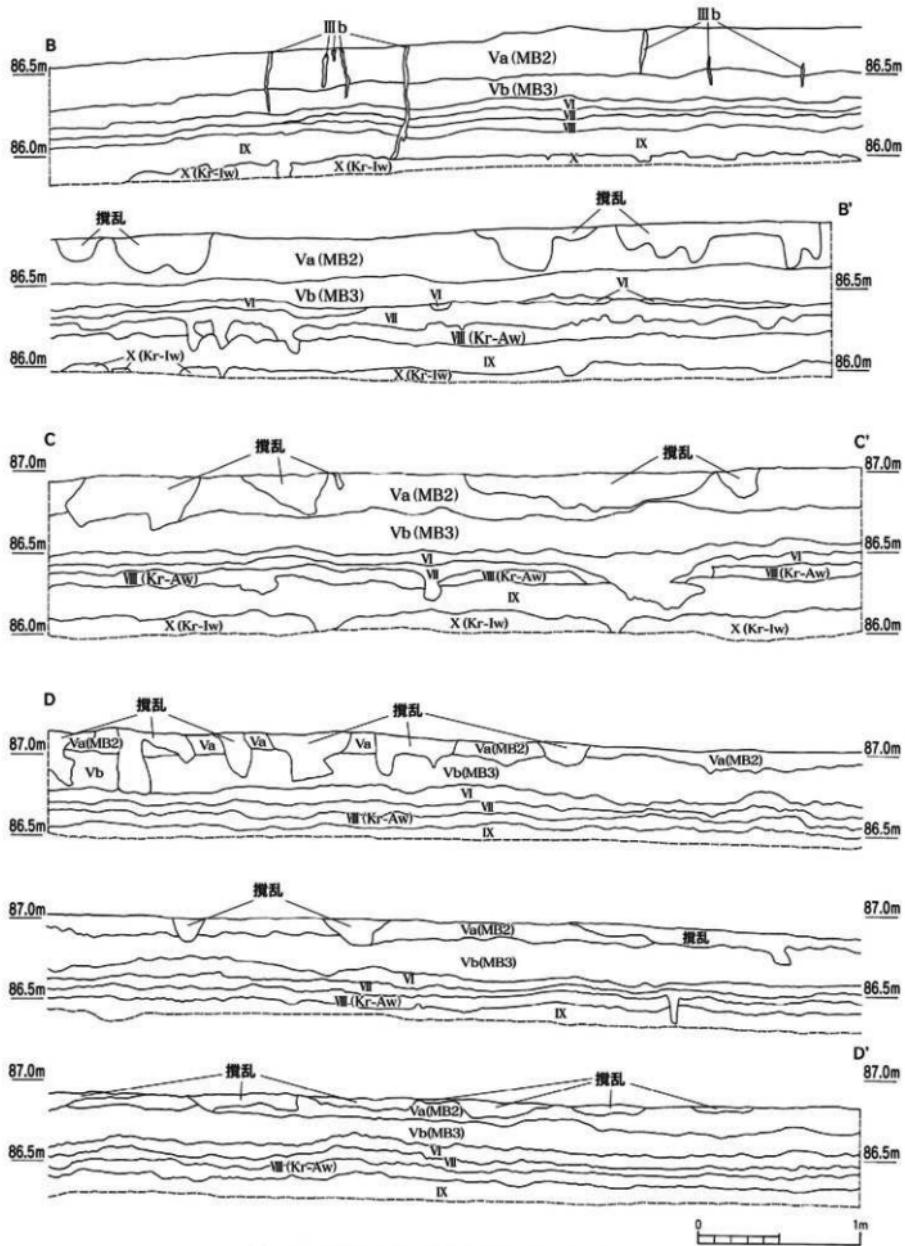
層序	特徴
表土	耕作土。黒褐色土。平均の厚さ約15cm。
I (K-Ah)	鬼界アカホヤ火山灰。黄褐色土(Hue10YR 5 / 6)。二次堆積か。全体的に濁り気味。堆積は不安定。
IIa(MB 0)	暗褐色土(Hue7.5YR 3 / 4)。いわゆるクロニカ。南西部緩斜面の一部で確認。遺物は無し。
IIb (ML 1)	褐色土(Hue10YR 3 / 3)。II a層よりやや固くしまり粘性がある。部分的に斑点状のシミ。南西部緩斜面の一部で確認。
III (ML 2)	黄褐色土(Hue10YR 5 / 8)。粘性がありややしまり強。北東部・南西部の緩斜面付近で確認。A Tの二次堆積又は土壤化したものか。遺物包含層。
IV (AT)	始良Tn火山灰。黄橙色土(Hue10YR 7 / 8)。サラサラでしまり粘性はない。下部には白色粒子を帶状に含む。中央・西部では削平され残存しない。
Va(MB 2)	暗褐色土(Hue10YR 3 / 3)。非常に固くしまり、クラックが発達する。その間に「」層又は、層が入る。白色粒を多く含む。ほぼ全域で見られるが、斜面では堆積状況が不安定。遺物包含層。
Vb(MB 3)	褐色土(Hue7.5YR 4 / 3)。固くしまる。V層に比べやや明るく軟らかい。白色粒子も少ない。斜面では堆積状況が悪く、Va層・VI層との区別が困難。遺物包含層。
VI	明褐色土(Hue7.5YR 5 / 6)柔らかく、粘性がある。赤褐色や青灰色のスコリアが散在。
VII (ML 3)	赤褐色土(Hue 5 YR 4 / 6)。スコリアが散在。
VIII (Kr-Aw)	明赤褐色土(Hue 5 YR 5 / 6)。非常に固くしまり、サラサラ。橙色・青灰色のスコリアを多く含む。
IX (ML 4)	明褐色土(Hue10YR 6 / 6)。やや固くしまり、赤褐色や黒褐色のスコリアが散在。
X (Kr-Iw)	明赤褐色土(Hue 5 YR 5 / 8)。非常に固くしまり、サラサラ。白色～赤褐色の粗粒子を多く含む。
X I	明黄褐色土(Hue10YR 6 / 8)。下部は礫を多く含み、水分が多い。



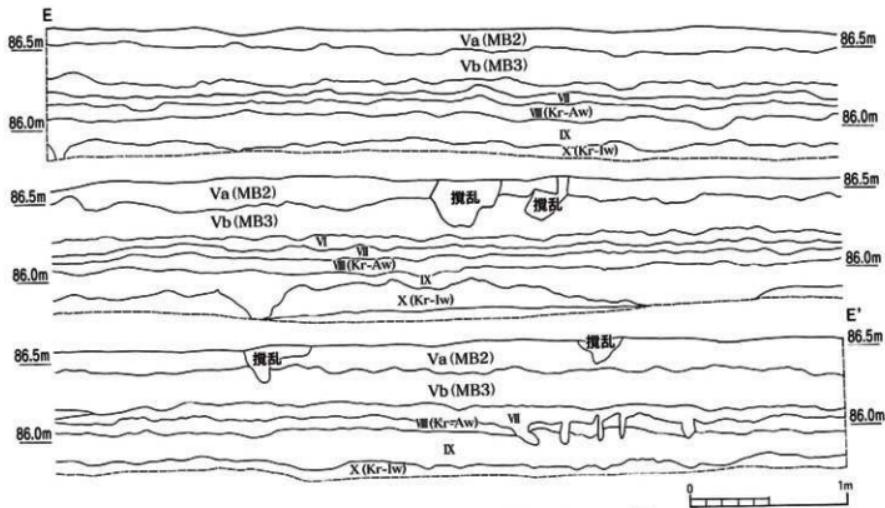
第5図 土層断面実測図作成位置図 ($S = 1/1,000$)



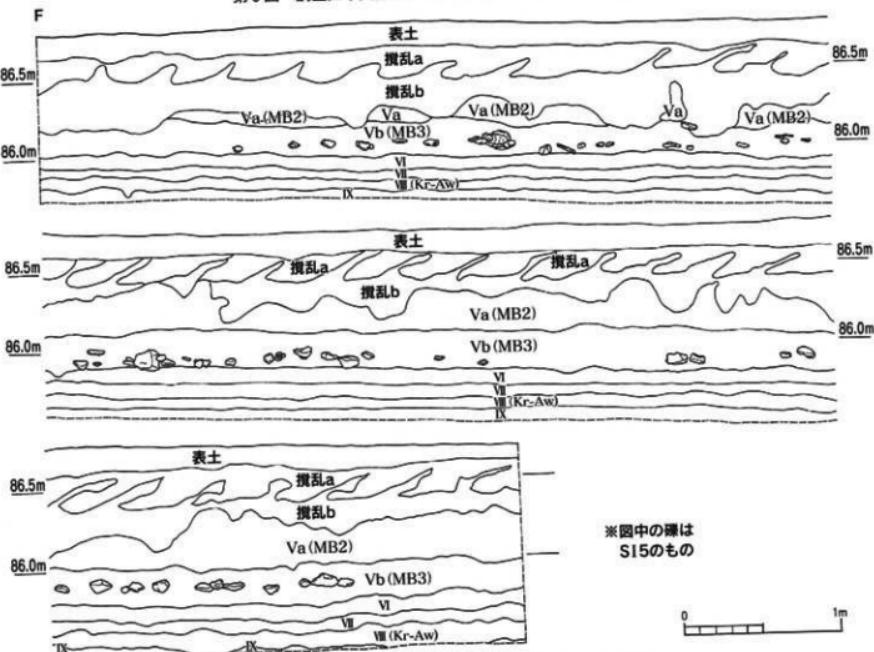
第6図 調査区北東部東西方向土層断面図 ($S = 1/30$)



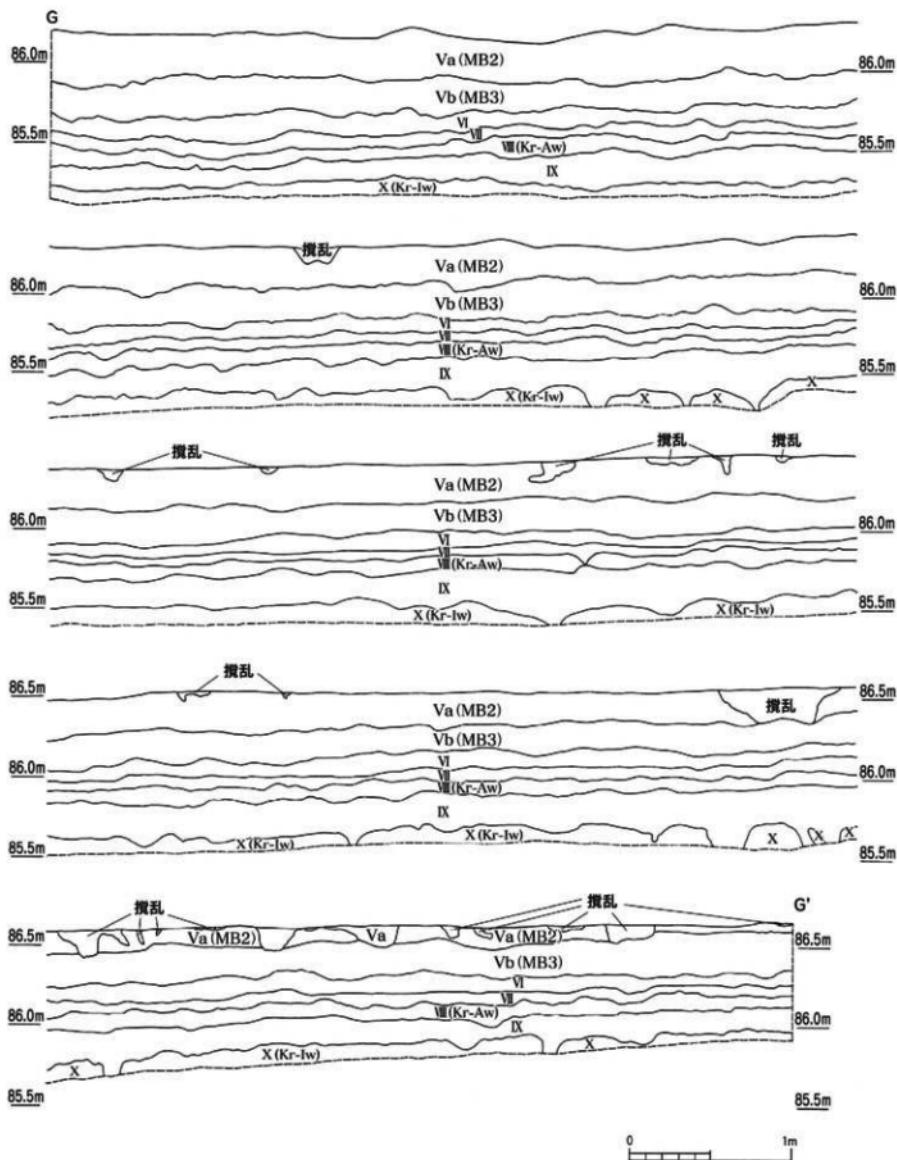
第7図 調査区北部南北方向土層断面図 ($S = 1/30$)



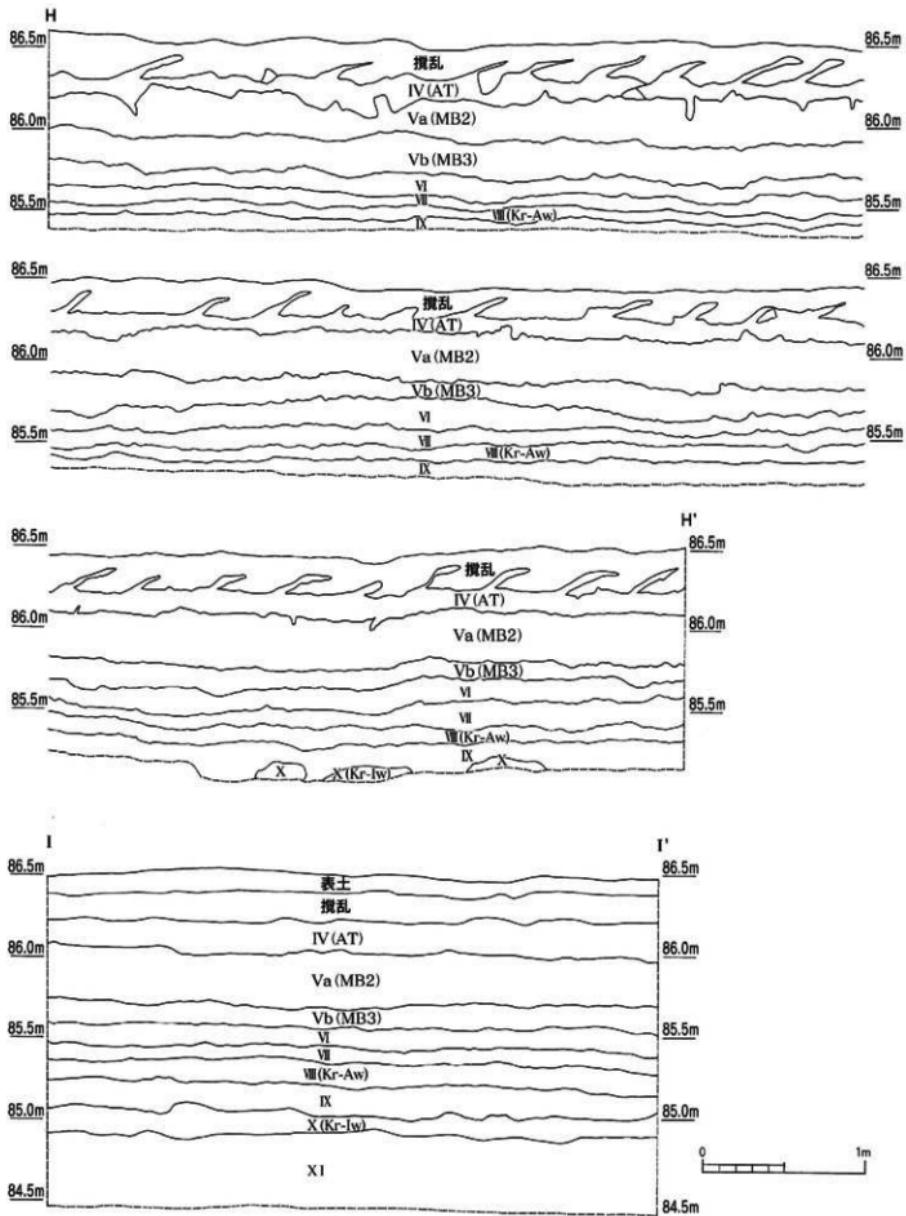
第8図 調査区中央部東西方向土層断面図 ($S = 1/30$)



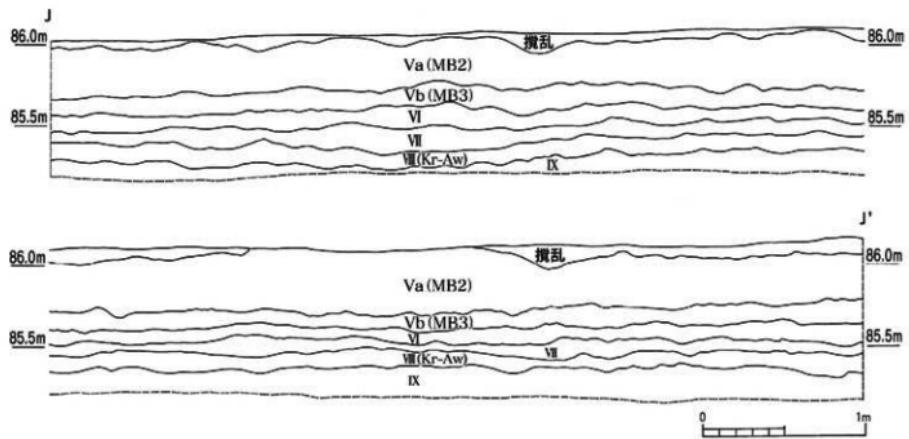
第9図 調査区中央部北東方向土層断面図 ($S = 1/30$)



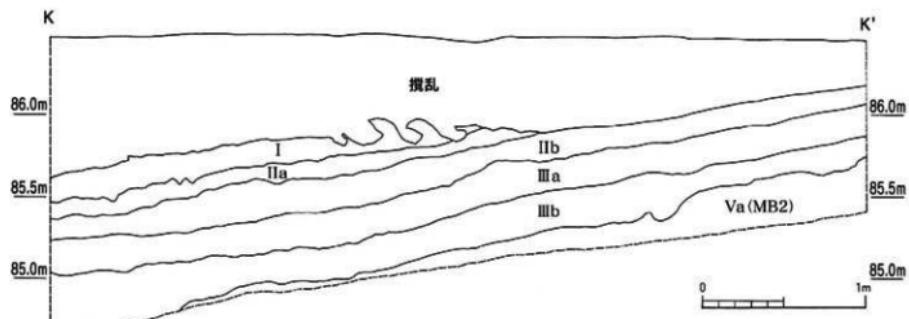
第10図 調査区中央部南北方向土層断面図 ($S = 1/30$)



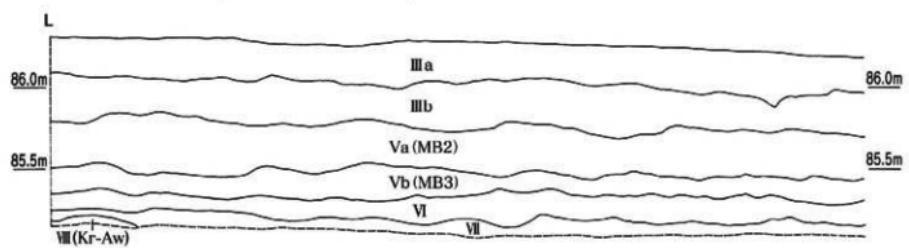
第11図 調査区中央部北東方向土層断面図2 (S = 1 / 30)



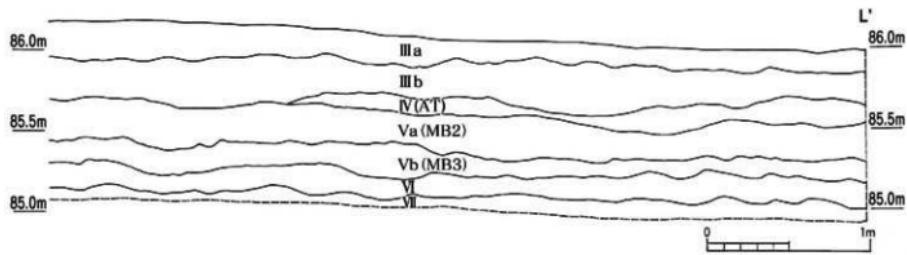
第12図 調査区中央部東西方向土層断面図 ($S = 1/30$)



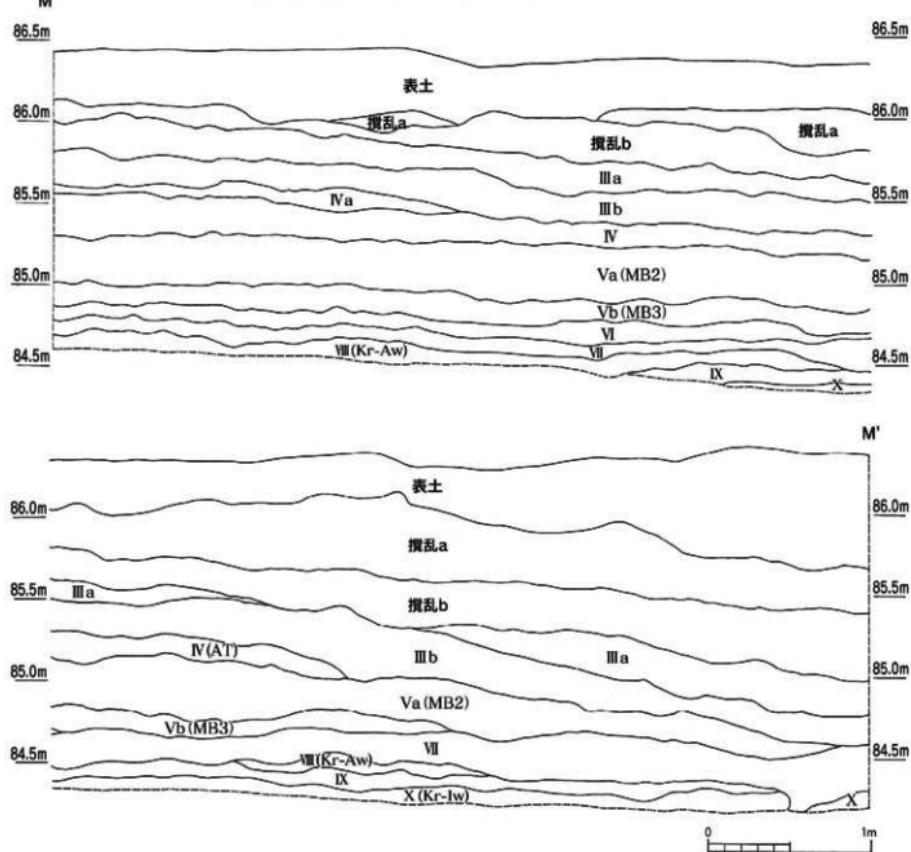
第13図 調査区西部北西方向土層断面図 ($S = 1/30$)



第14図 調査区西部南北方向土層断面図 ($S = 1/30$)



第15図 調査区西部南北方向土層断面図 ($S = 1/30$)



第16図 調査区南西部東西方向土層断面図 ($S = 1/30$)

第3節 旧石器時代の遺構と遺物

1 文化層の設定

旧石器時代の遺構・遺物にはおおまかに三つの層位的まとまりが認められた。これらを下の層位から第Ⅰ～Ⅲ文化層と設定した。AT下位石器群である第Ⅰ・Ⅱ文化層はそれぞれ黒色帯下部（V b層=MB 3）と黒色帯上部（V a層=MB 2）を中心に検出された。第Ⅲ文化層はAT上位石器群であり、ナイフ形石器や角錐状石器、細石刃石器群を含んでおり、細分できる可能性が高い。

2 碾群の認定

第Ⅰ～Ⅲ文化層のほぼ全域から碾が検出された。調査段階で各碾間の距離やまとまりの状況を視覚的に判断して、「碾群」（略称S I）として認定した。基本的には、10個以上のまとまりがあるものを認定したが、各文化層又は各碾群により、構成する碾の大きさや数、石材、まとまりの範囲等には差異が見られる。第Ⅰ文化層で12基、第Ⅲ文化層で4基、第Ⅲ文化層で4基の碾群を検出した。

3 旧石器時代第Ⅰ文化層の遺構と遺物

（1）概要

第Ⅰ文化層は、基本層序のV b層（MB 3）からVI層にかけての文化層である。北東部と南西部の緩斜面下を除く調査区のほぼ全域から、12基の碾群を

検出した。遺物は261点の石器を検出したが、碾群に伴って検出されたものが多い。石器の内訳はトゥールが44点、剥片・石核が217点である。

（2）遺構

碾群の範囲は半径5m以上のがほとんどである。碾の密集度は散漫なものが多い。構成する碾は全体的に砂岩、ホルンフェルスの順に多く、半数以上の個数を占める。全ての碾群において、割合の差はあるが赤化した碾および石器を検出している。また炭化物の検出された碾群は2基である。

詳細は、第17～31図・添付資料等に示している。

S I 1（第20図）

調査区北東部のV b層（MB 3）～VI層で検出。碾群の範囲は東西に長く、長径約20m、短径約10m。碾の密集度は散漫で、地形は東に向かうほど緩やかに下るため碾も疎らになる。碾の総数は95個で、砂岩が約70%（66個）を占める。碾群内で2組（6点）、碾群外の碾と5組（10点）が接合。最長の接合例は約45mで、S I 5の碾と接合している。碾群内において石器8点（石核1、剥片7）を検出。南側にS I 2が隣接するが、境界を定めにくい状況で碾が分布する。碾は調査区の北側境界付近まで分布することから、碾群は調査区外北側にも拡がるものと推測される。

S I 2（第21図）

調査区北東部のV b層（MB 3）～VI層で検出。S I 1の南側に隣接するが、碾の分布状況から明確な境

第5表 旧石器時代第Ⅰ文化層の石器・石材組成

	削器・接着器	碾 器	石 核	R.f.	剥 片	敲 石	台 石	計
ホルンフェルス	1	2	11	1	116			131
頁 岩		1	4	3	80	2		90
流紋岩					7			7
黒曜石					7			7
チャート					3			3
砂 岩		1				19		20
尾鈴山酸性岩類						1	2	3
計	1	4	15	4	213	22	2	261

界は定めにくい。礫群の範囲は長径約14m、短径約10m。礫の密集度は散漫で、地形は南東に向かうほど緩やかに下り礫も疎らになる。礫の総数は107点で、砂岩74%（79個）を占める。礫群内で2組（4点）、礫群外の礫と1組（2点）が接合。最長の接合例は約3.2mである。礫群内の礫が密集する範囲から石器16点（石核2、剥片7、礫器2、敲石4、台石1）を検出した。

S I 3 (第22図)

調査区北部のV b層(MB 3)～VI層で検出。S I 1・2の西側に位置する。礫群の範囲は長径約24m、短径約12mである。礫の密集度は非常に散漫。礫の総数は76点で、砂岩が54%（41点）を占める。礫群内で4組（8点）が接合するが、礫群外とは接合しない。礫群内において石器5点（剥片2、敲石3）を検出。礫は調査区の西側境界付近まで分布することから、礫群は調査区外西側にも拡がるものと推測される。

S I 4 (第23図)

調査区中央北東部のV b層(MB 3)～VI層で検出。S I 2とS I 5の間に位置する。礫群の範囲は長径約14m、短径約8mで、礫の密集度は散漫。礫の総数は62点で、砂岩約45%（28点）、尾鷲山酸性岩類約30%（18点）、ホルンフェルス約18%（11点）の内訳。礫群内で3組（8点）が接合するが、礫群外とは接合しない。礫群内において石器2点（石核1、剥片2）を検出。礫は調査区の東側境界付近まで分布することから、礫群は調査区外東側にも拡がるものと推測される。

S I 5 (第24図)

調査区中央東部のV b層(MB 3)～VI層で検出。礫群の範囲は東西に長く、長径約16m、短径約8mである。礫の密集度は散漫ながら、他の礫群に比べると高い。礫の総数は第1文化層中の2番目に多く、248点で砂岩約60%（149点）、ホルンフェルス約20%（49点）の内訳。礫群内で9組（18点）、礫群外の礫と2組（4点）が接合する。礫群内において石器3点（剥片2、敲石1）を検出。礫は調査区東側境界付近まで分布することから、礫群は調査区外東側にも拡がるものと推測される。

S I 6 (第25図)

調査区中央部のV b層(MB 3)～VI層で検出。礫群の範囲は東西に長く、長径約18m、短径約12m。礫の密集度は散漫である。礫の総数は123点で、砂岩約50%（59点）、ホルンフェルス約25%（30点）の内訳。礫群内で9組（21点）、礫群外の礫と1組（5点）が接合した。礫群内において石器4点（二次加工剥片1、剥片1、敲石2）を検出した。

S I 7 (第26図)

調査区中央からやや南側のV b層(MB 3)～VI層で検出。礫群の範囲は長径約10m、短径約8m。礫の密集度は散漫であるが、他の礫群に比べると高い。礫の総数は82点と少ない。砂岩が約40%（32個）、ホルンフェルス約27%（22個）の内訳。礫群内で7組（24点）、礫群外の礫と4組（8点）が接合。礫群内において石器24点（剥片22、敲石2）を検出。

礫は調査区の東側境界付近まで分布することから、礫群は調査区外にも拡がるものと推測される。

S I 8 (第27図)

調査区西部のV b層(MB 3)～VI層で検出。礫群の範囲は南北に長く、長径約12m、短径約8m。礫の密集度は散漫である。礫の総数は158個で、砂岩約50%（84個）、ホルンフェルス約25%（42個）の内訳。礫群内で2組（6点）、礫群外の礫と5組（10点）が接合。礫群内において石器11点（石核2、剥片9）を検出した。

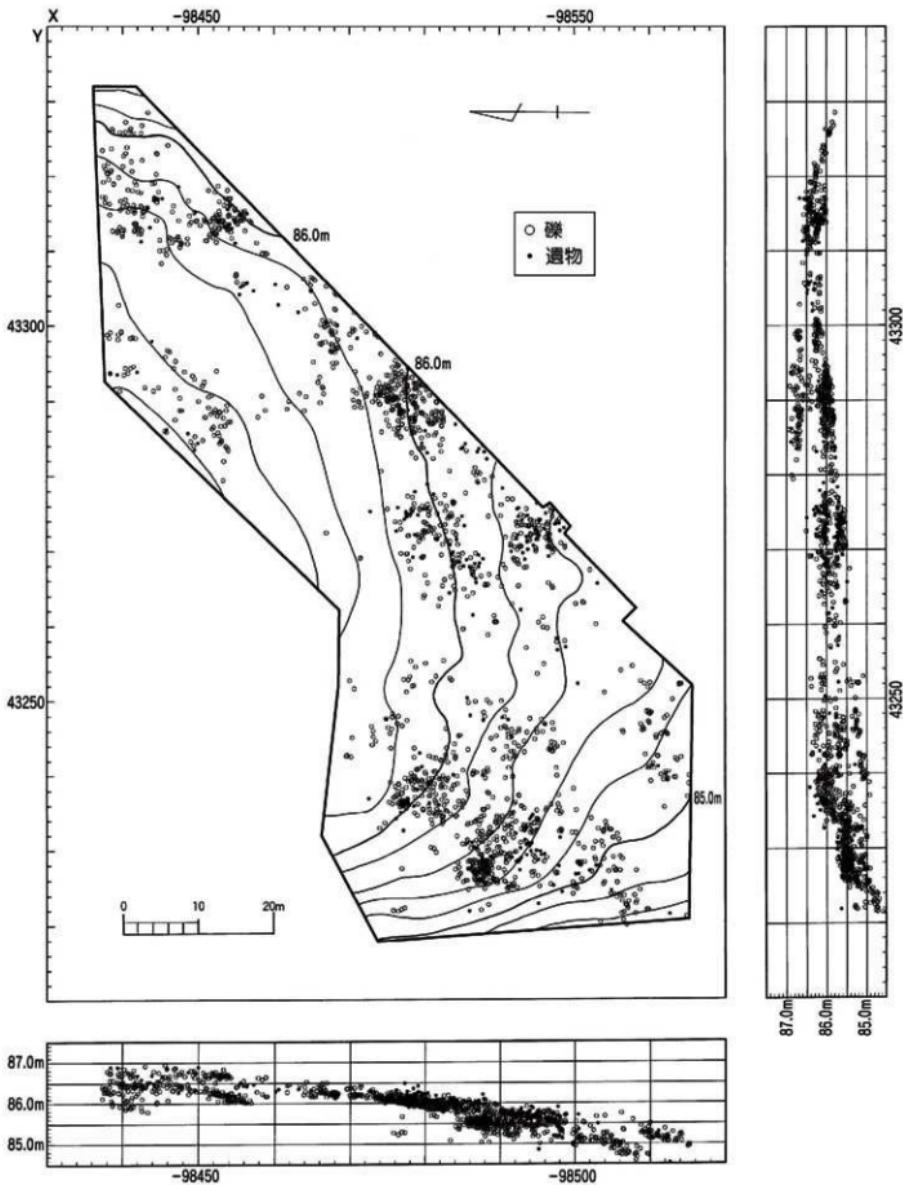
S I 9 (第28図)

調査区西部のV b層(MB 3)～VI層で検出。地形は南西に向って緩やかに下り、礫群の範囲は長径約14m、短径約13m。礫の密集度は散漫ながら、総数284個と第1文化層中、最多。砂岩約60%（168点）、ホルンフェルス約25%（70個）の内訳。礫群内で2組（7点）、礫群外の礫と5組（25点）が接合。

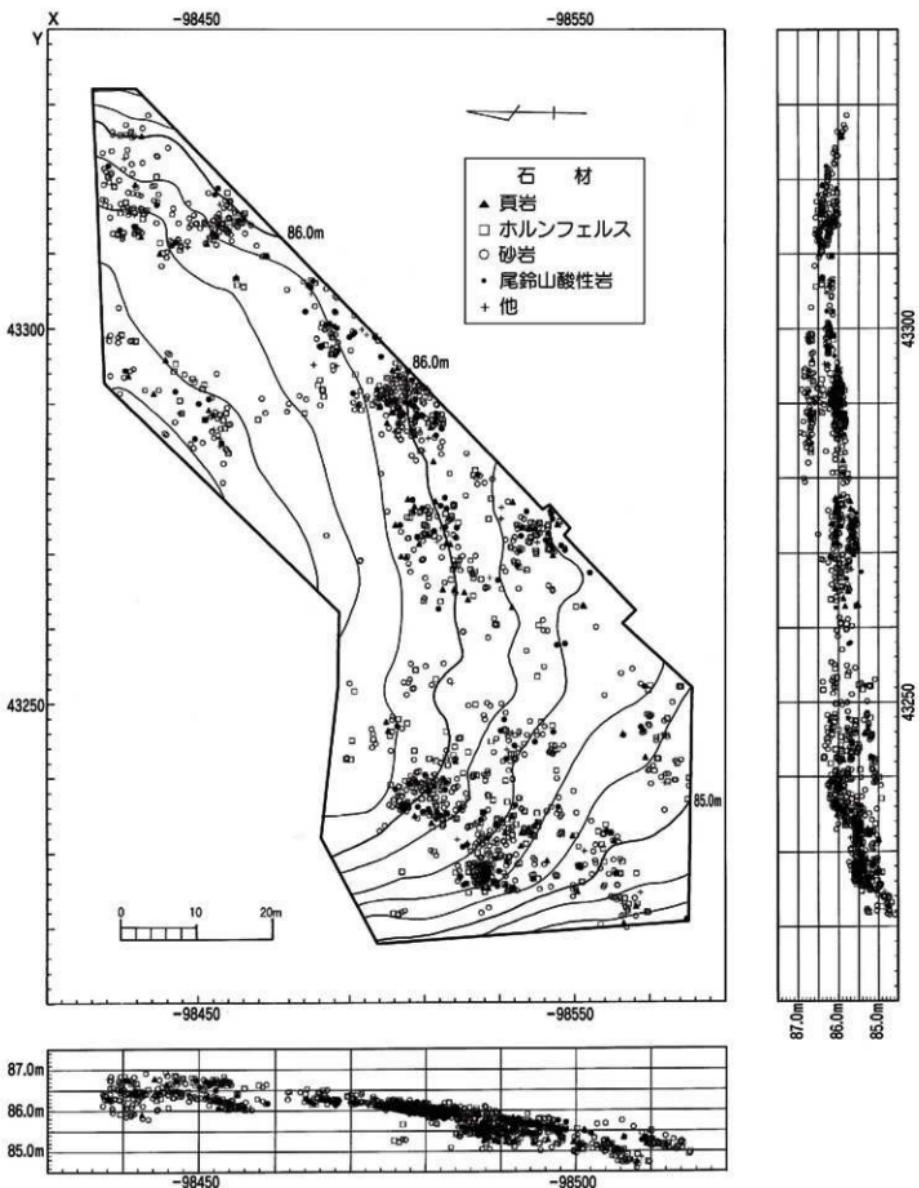
礫群内において、第1文化層中、最も数が多い石器64点（石核3、剥片61）を検出した。

S I 10 (第29図)

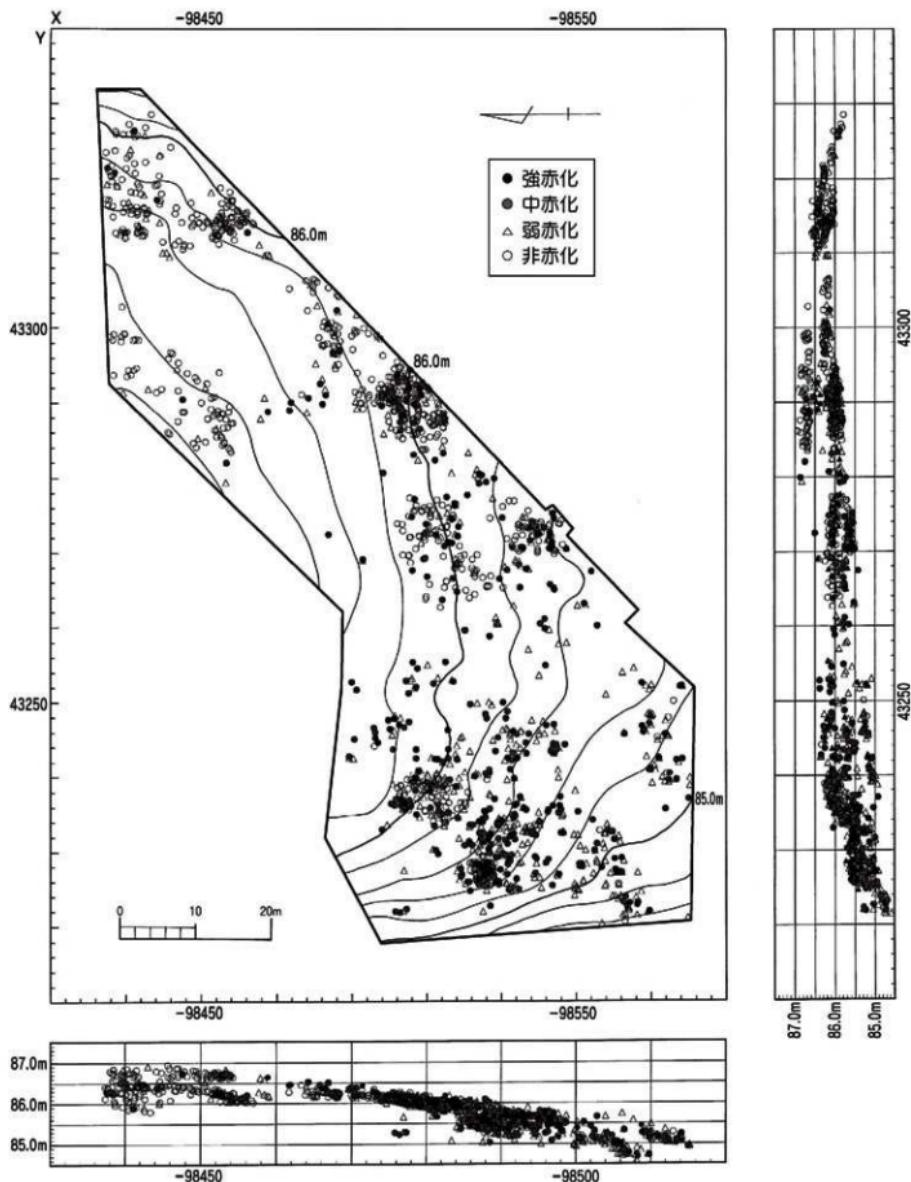
調査区中央部のV b層(MB 3)～VI層で検出。礫群の範囲は長径約14m、短径約10m、礫の密集度は非常に散漫である。礫の総数は55個で、第1文化層の中では最少。



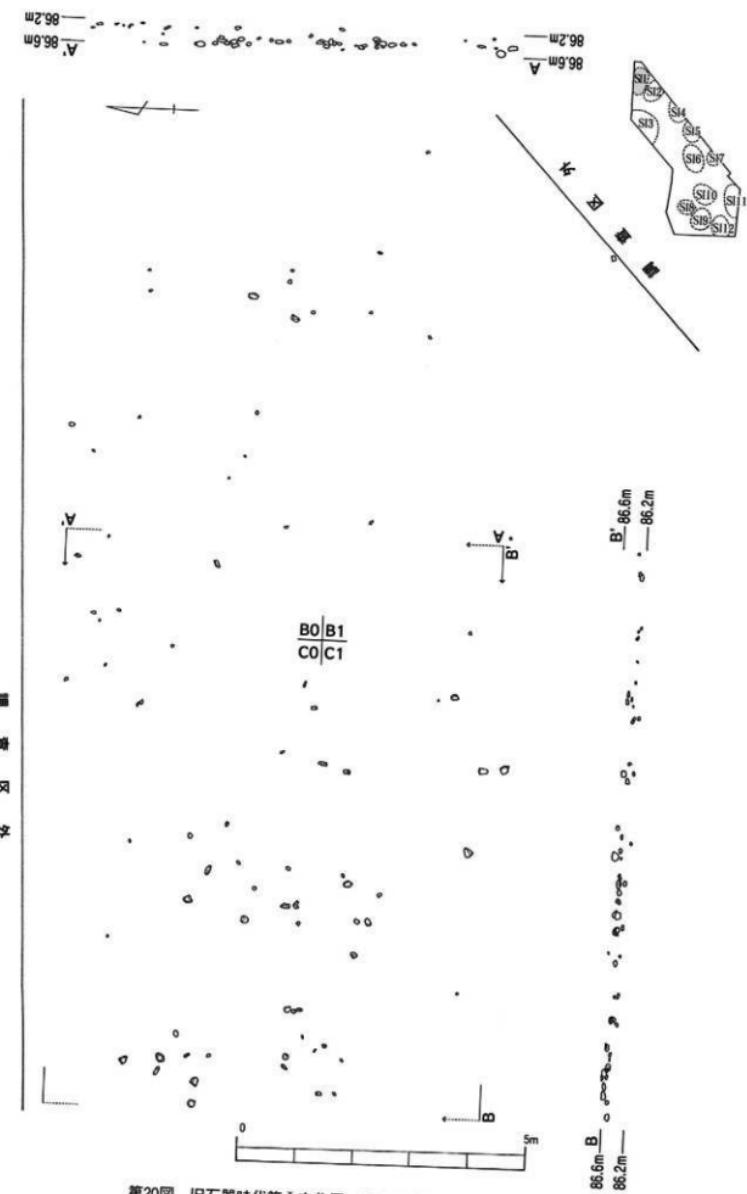
第17図 旧石器時代第Ⅰ文化層 遺構・遺物分布図 (S = 1 / 650)



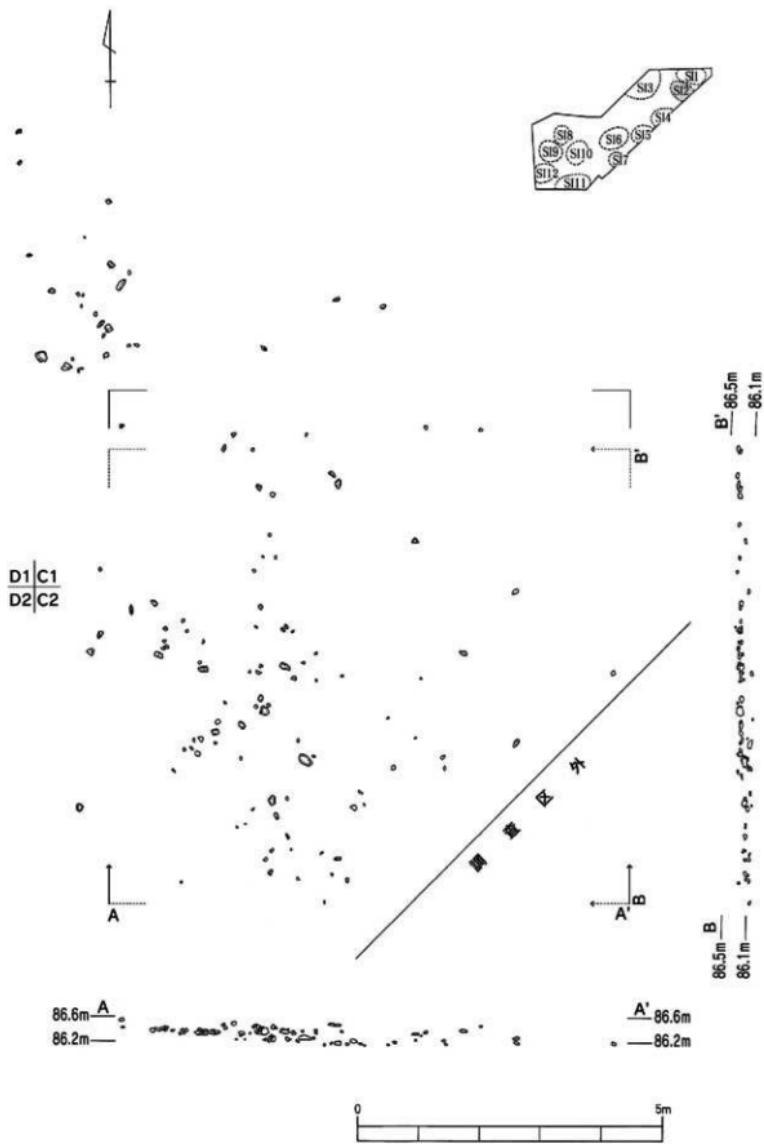
第18図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石材別礫分布図 ($S = 1 / 650$)



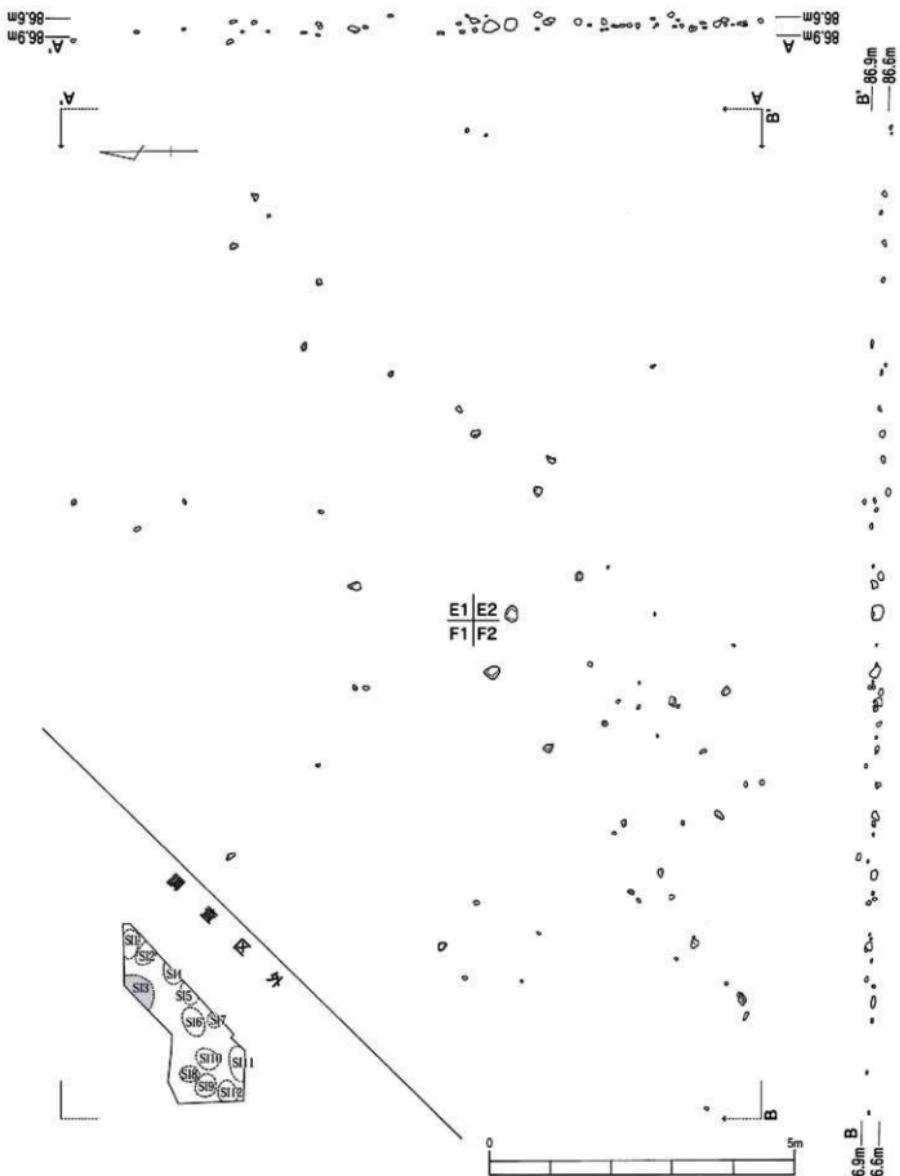
第19図 旧石器時代第Ⅰ文化層 赤化度別礫分布図 ($S = 1 / 650$)



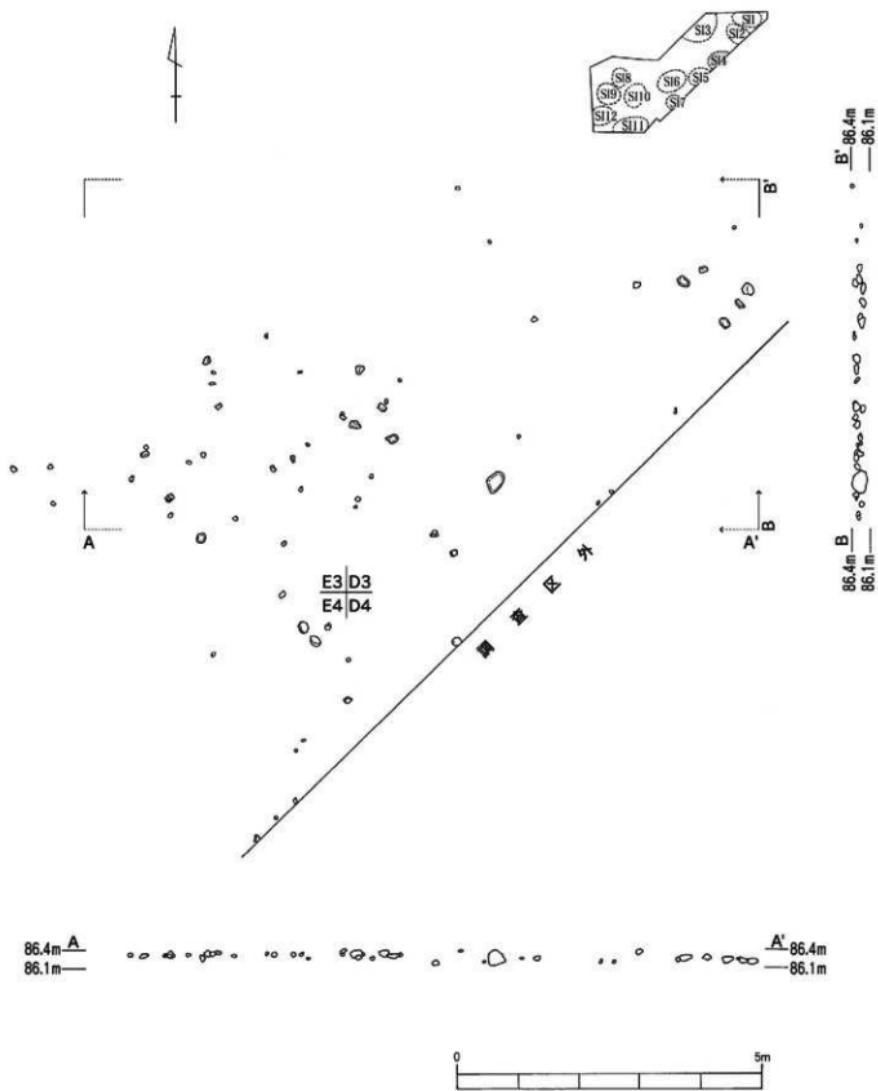
第20図 旧石器時代第I文化層 SII 実測図 (S = 1/30)



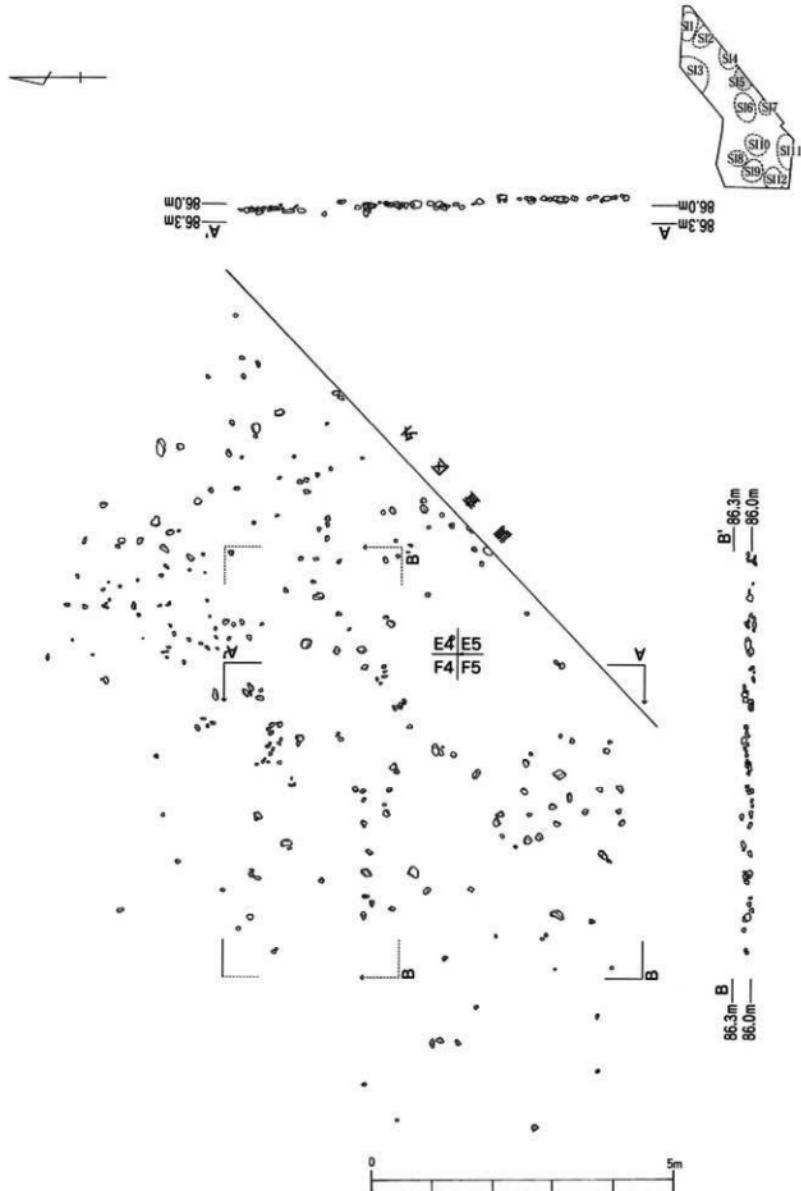
第21図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 2 実測図 (S = 1 / 30)



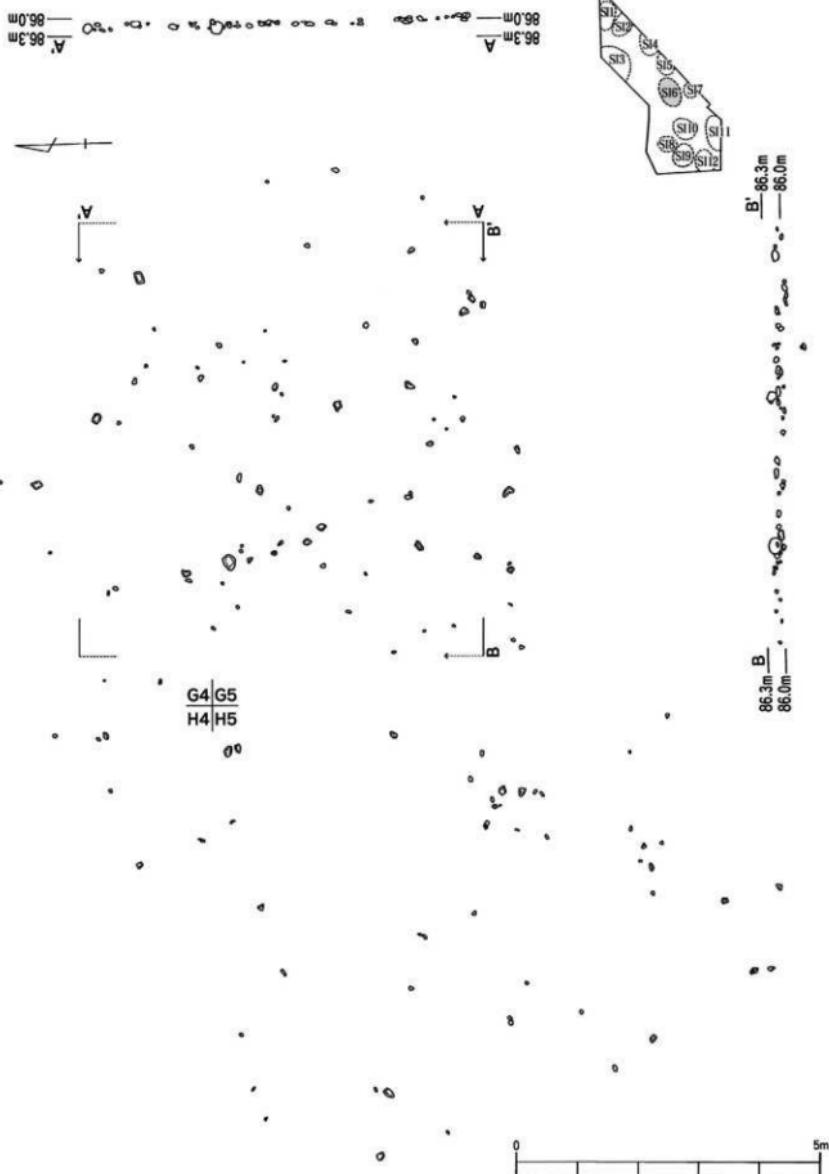
第22図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 3 実測図 ($S = 1/30$)



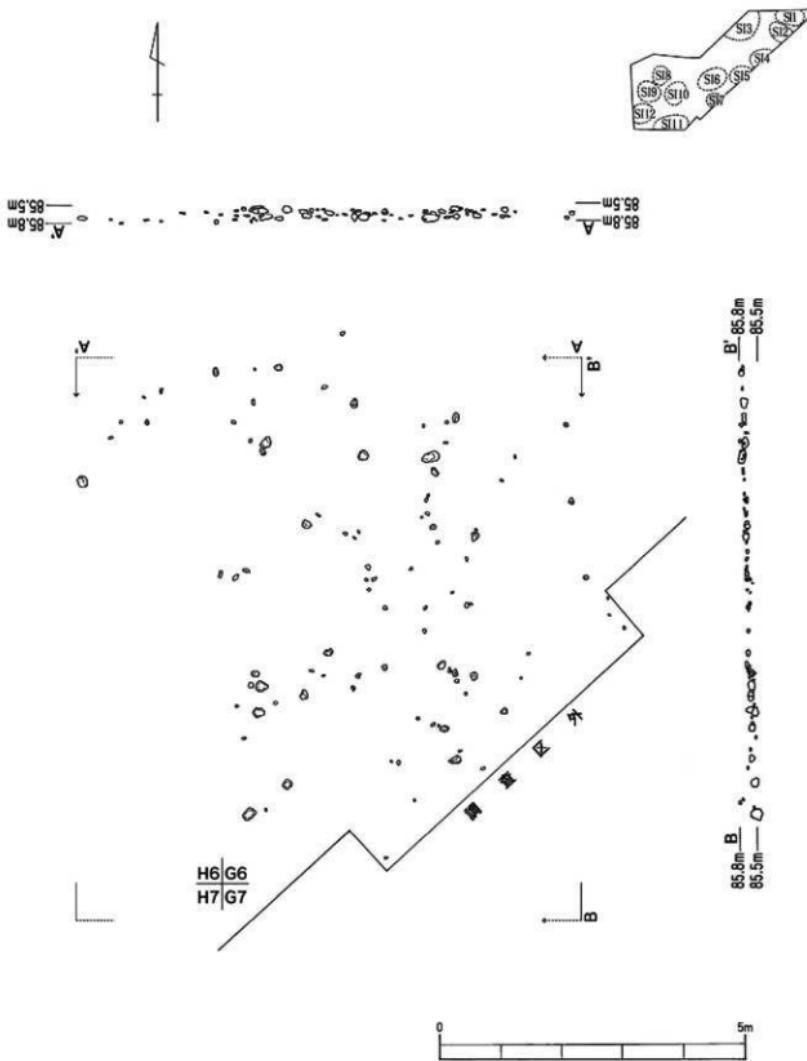
第23図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 4 実測図 (S = 1/30)



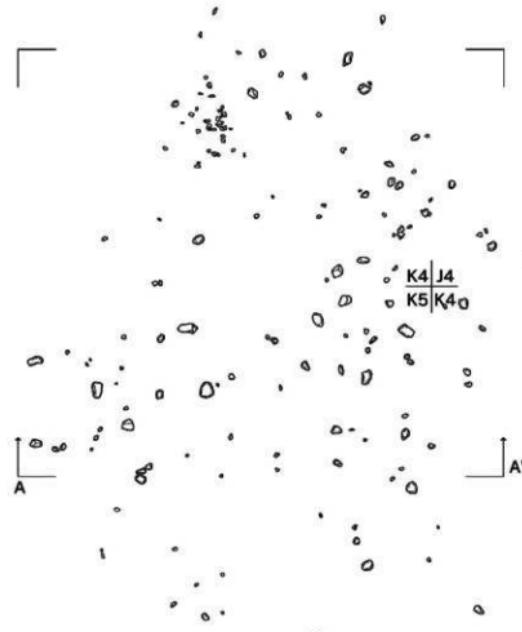
第24図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S 15 実測図 (S = 1 / 30)



第25図 旧石器時代第Ⅰ文化層 SI 6 実測図 (S = 1/30)



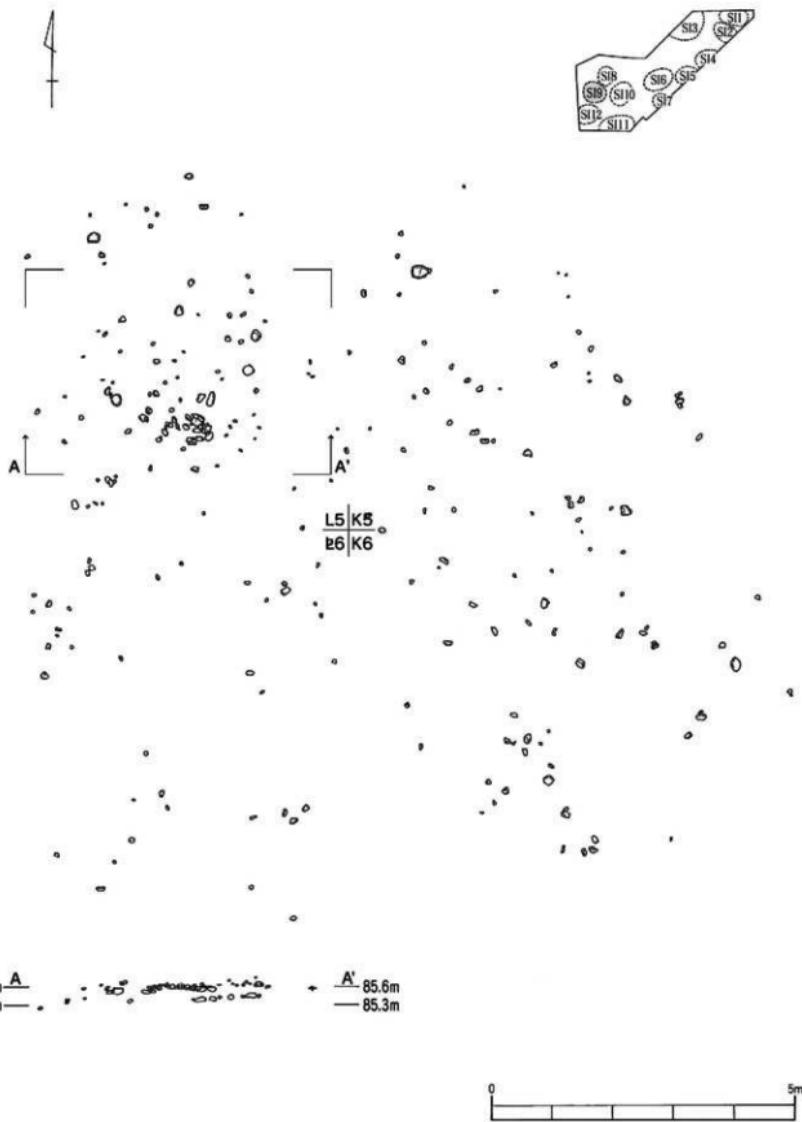
第26図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S.I.7 実測図 (S = 1/30)



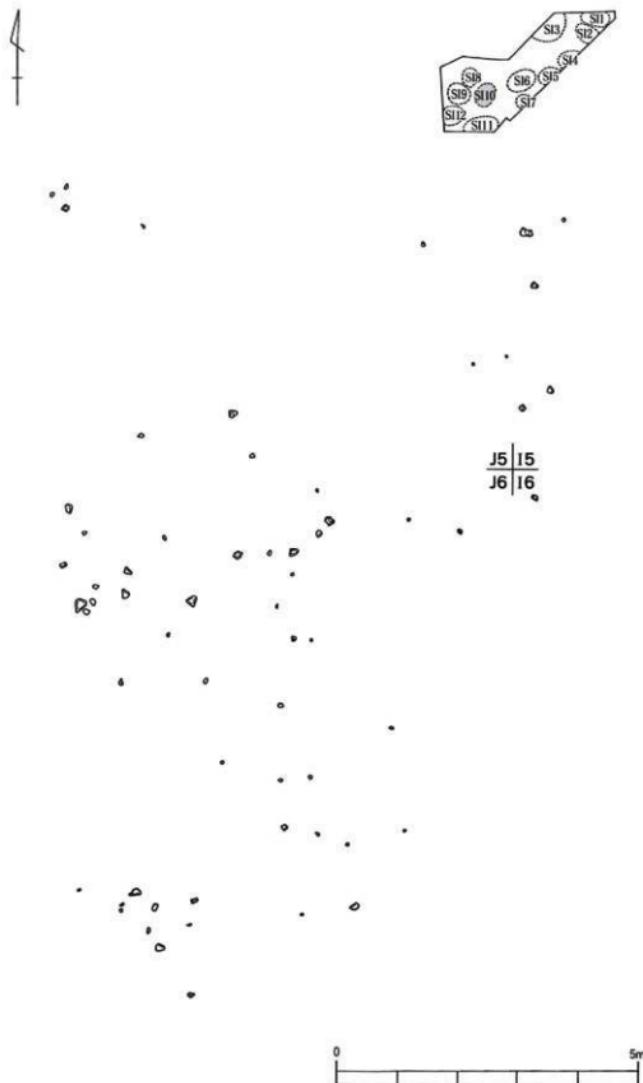
86.3m A
86.0m ————— A' 86.3m
86.0m —————



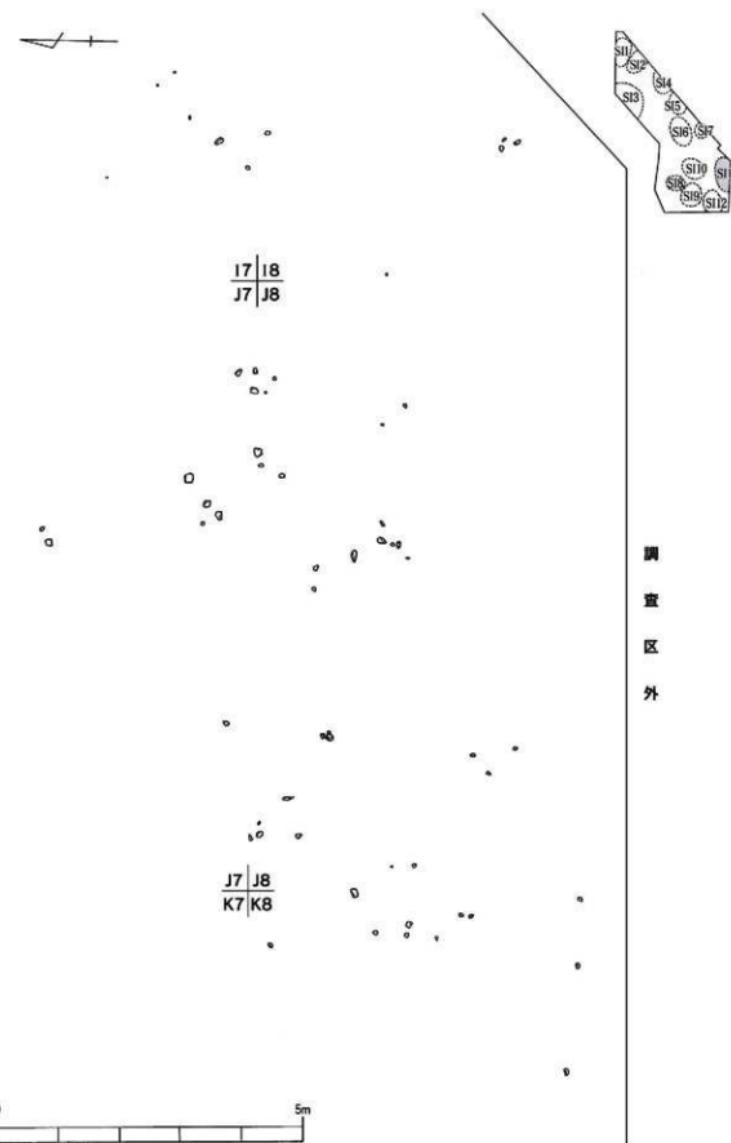
第27図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 8 実測図 ($S = 1/30$)



第28図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S-I 9 実測図 (S = 1/30)



第29図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 10実測図 ($S = 1/30$)



第30図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 111実測図 ($S = 1/30$)

— + —



J6 | J7
K6 | K7

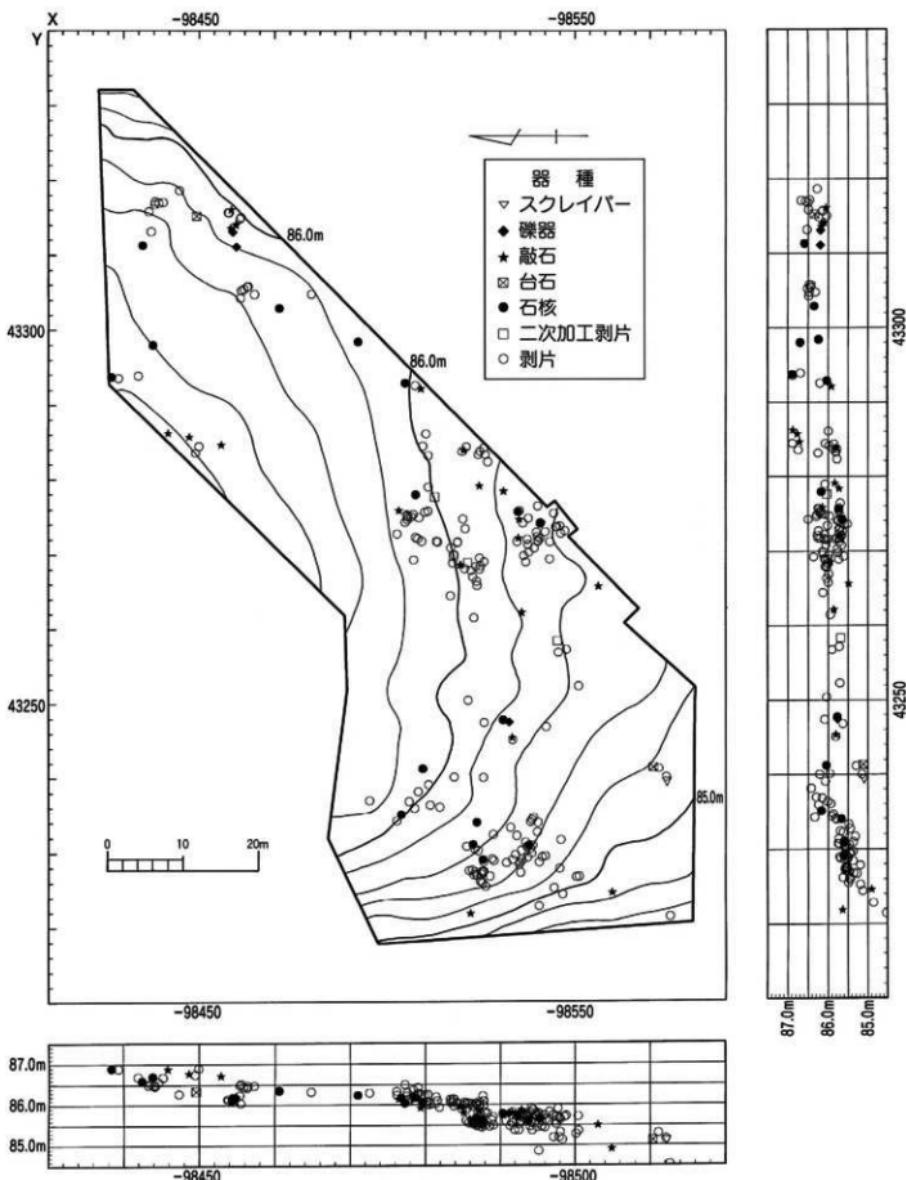
J7 | J8
K7 | K8

K6 | K7
L6 | L7

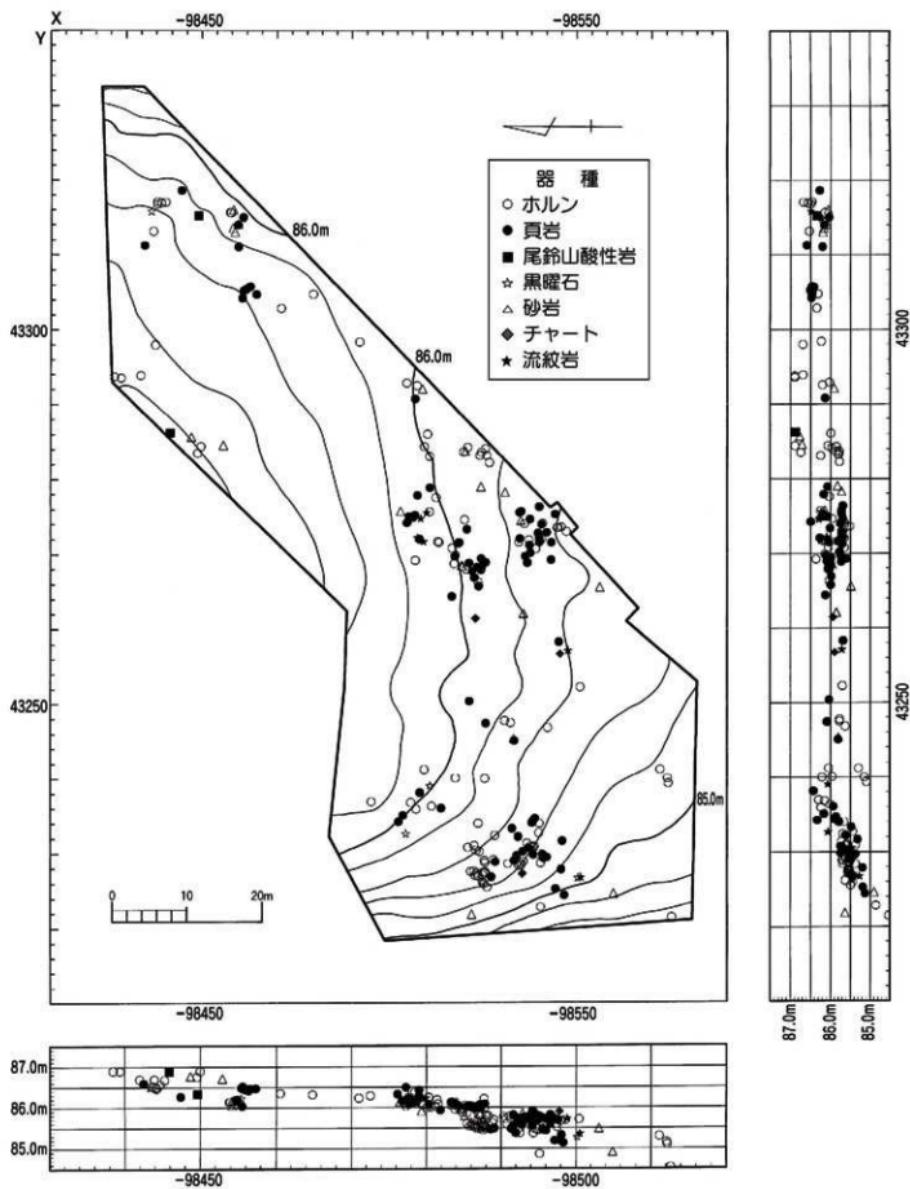
K7 | K8
L7 | L8



第31図 旧石器時代第Ⅰ文化層 S I 12実測図 (S = 1/30)



第32図 旧石器時代第Ⅰ文化層 器種別遺物分布図 (S = 1 / 650)



第33図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石材別遺物分布図 ($S = 1/650$)

砂岩約65% (36個), ホルンフェルス約20% (10個) の内訳。礫の接合は確認できなかった。礫群内において石器7点 (石核1, 剥片3, 磨器1, 敵石2) を検出。S 111 (第30図)

調査区南部のV b層 (MB 3) ~ VI層から検出。礫群の範囲は長径約18m, 短径約19mである。礫の总数は60点で、密集度は非常に散漫である。砂岩約60% (37点), ホルンフェルス約25% (16点) を占める。礫の接合は確認されない。礫群内において石器4点 (スクレイバー1, 剥片2, 台石1) を検出した。

S 112 (第31図)

調査区西部のV b層 (MB 3) ~ VI層で検出した。地形は南西に向って緩やかに下り、礫群の範囲は長径が約14m, 短径が約10mである。

礫の密集度は散漫である。总数は98個で、砂岩が約65% (65個), ホルンフェルス約20% (20個) を占める。礫の接合は確認されなかった。

礫群内において石器2点 (剥片1, 敵石1) を検出した。

(3) 遺物

以下、使用石材ごとに石器について説明を加える。

A ホルンフェルス製の石器

接合資料1 (第36図1~4, 第37図5)

節理がやや多く走る石質。4枚の剥片と1個の石核からなる。打面調整を施さず礫面を打面として1~3の剥片を獲得する。作業面調整も顕著ではない。4はそれまでの作業面に打面を転移して得られている。いずれの剥片剥離も節理に影響されるためか、不定形な剥片を得るにとどまると推定できる。

接合資料2 (第37図6~9)

剥片4枚からなる。石質は接合資料1に似るが比較してやや良質。いずれも不定形剥片。

接合資料3 (第38図10~12)

10は1枚の幅広剥片が二つに分割されている。これを合わせ剥片4枚からなる。石質は良質。

接合資料4 (第38図13~14)

1個の石核と8枚の剥片からなる。節理が多く走るなど、石質が接合資料1に酷似するが礫面の特徴が異なる。幅広・不定形剥片を生産する。17の石核

は礫器の製作を意図した可能性も残る。

非接合資料 (第41図22~第44図38)

22~23は礫器としたが、いずれも良質の石質であることから、剥片の獲得も狙った可能性を指摘できる。とりわけ、22は礫器の機能部と推定される縁辺に細かな剥離痕は観察されず、石核であった可能性を強く示す。いずれも交互剥離による。

25は搔器である。

24~26~33は石核である。24~33がわずかに縦長剥片を生産した可能性を窺わせるものの、他の資料は全て幅広・不定形剥片の獲得を意図した形跡を残す。28にみる剥離工程は、交互剥離の様相などが礫器とした22~23と共に通する。31からは石核素材となつた剥片のボジ面を取り込もうとした意图も窺える。原礫・分割礫・剥片など石核素材は多様であるが、いずれも生産される剥片の形態や顕著な打面・作業面調整を施さないなどの特徴を共有する。

34は二次加工剥片である。礫面側からスクレイバー状の加工を施す。

35~38は剥片である。概ね石核の様相と対応した剥片形態であるが、35は石刃である。頭部調整も観察される。

B 貝岩製の石器

接合資料5 (第44図39~41)

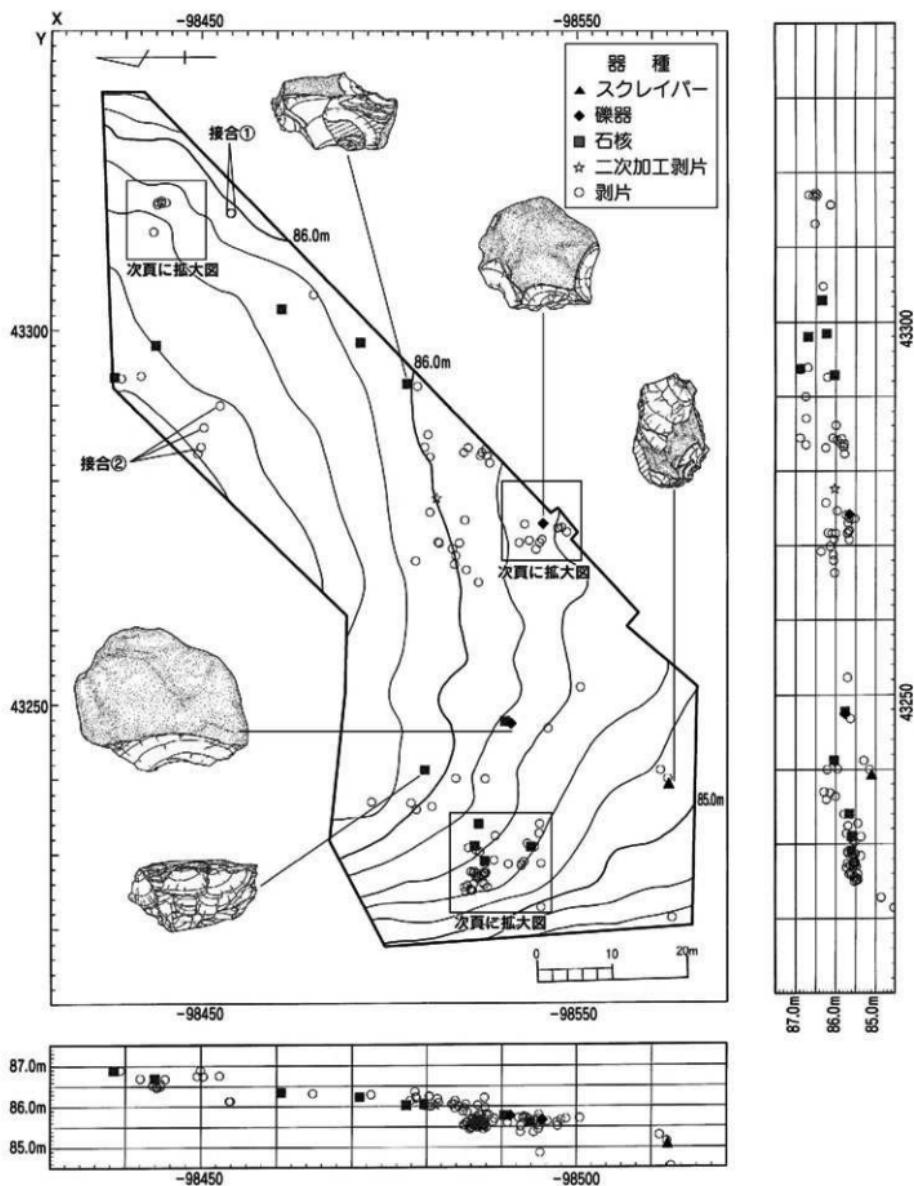
剥片1枚、碎片1枚、石核1個からなる。石核の素材は剥片で、背面・腹面両方向から剥片を剥離している。生産される剥片は39のような貝殻状剥片と推定される。

接合資料6 (第47図42~43)

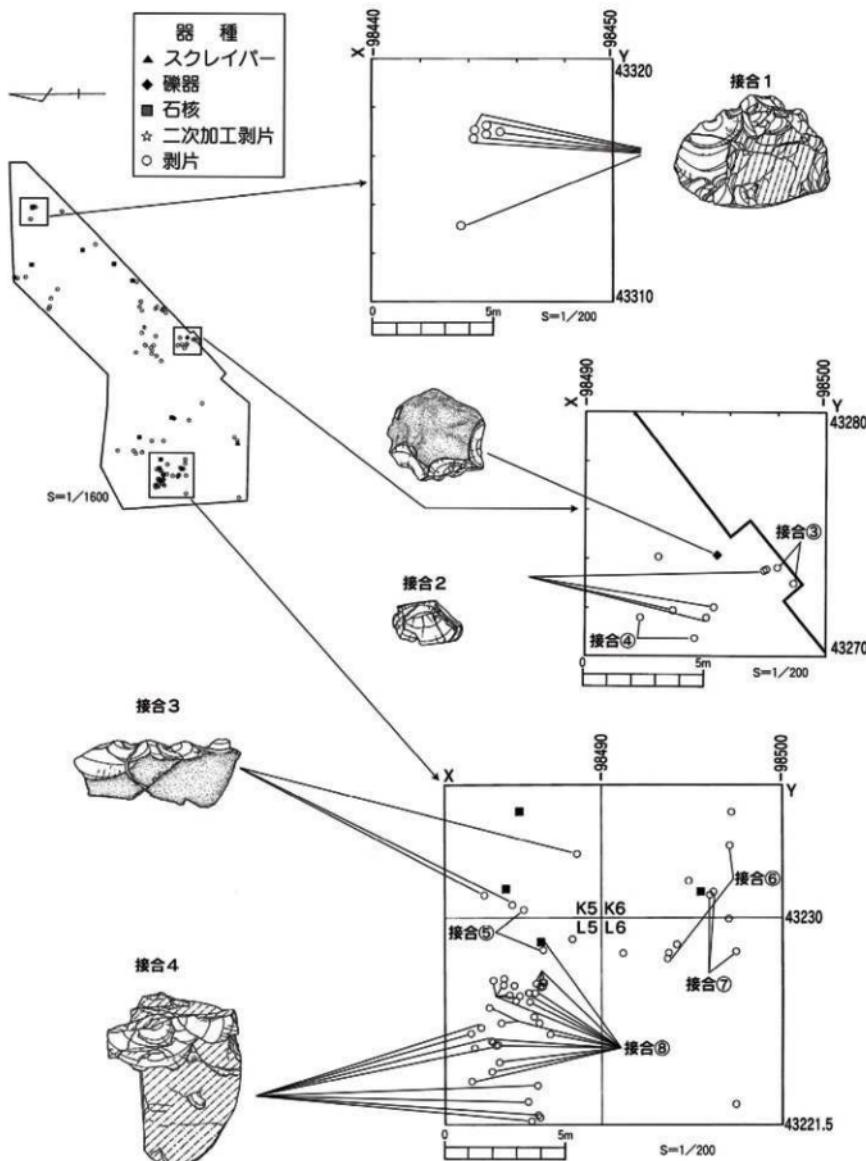
石核1個、剥片1枚からなる。石核素材は剥片で、そのバルブ側を作業面として背面・腹面両方向から剥片剥離をおこなっている。石核の作業面の側縁に1箇所尖鋒な部分が認められることから、錐状石器の未完成品である可能性もある。生産される剥片は接合資料5に同じく、小形の貝殻状剥片である。

接合資料7 (第47図44~48)

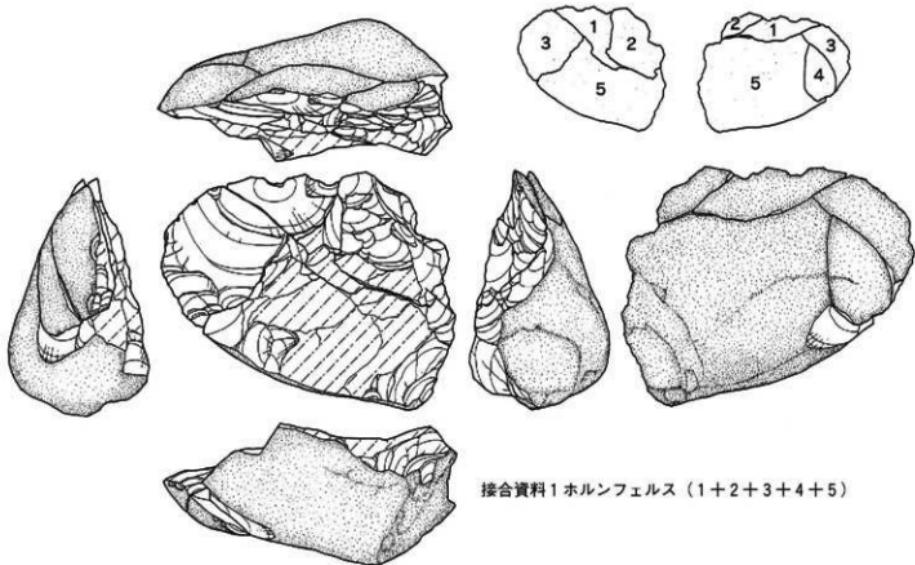
石核1個、剥片4枚からなる。48の石核は背面に礫面を配する大振りの剥片を素材とする。この石核の礫面を打面とし、幅広・不定形な剥片を剥いでいる。得られた剥片は全て石核素材となつた大振りの剥片



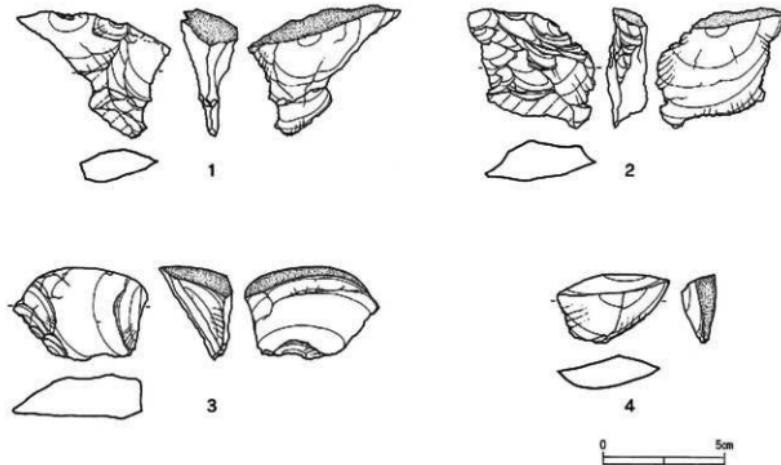
第34図 旧石器時代第Ⅰ文化層 ホルンフェルス製石器分布図1 (S=1/650)



第35図 旧石器時代第Ⅰ文化層 ホルンフェルス製石器分布図2 (S = 1 / 550)

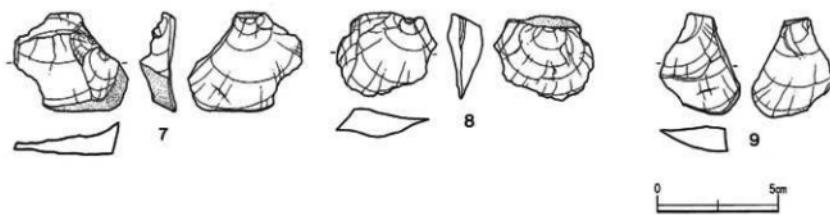
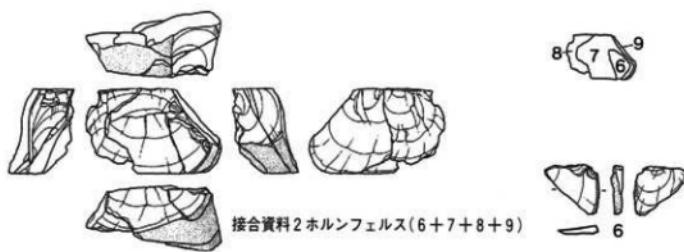
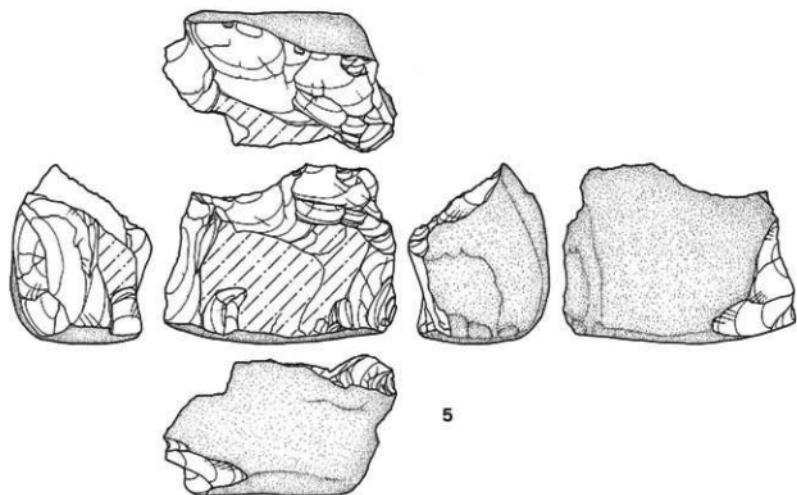


接合資料1 ホルンフェルス (1+2+3+4+5)

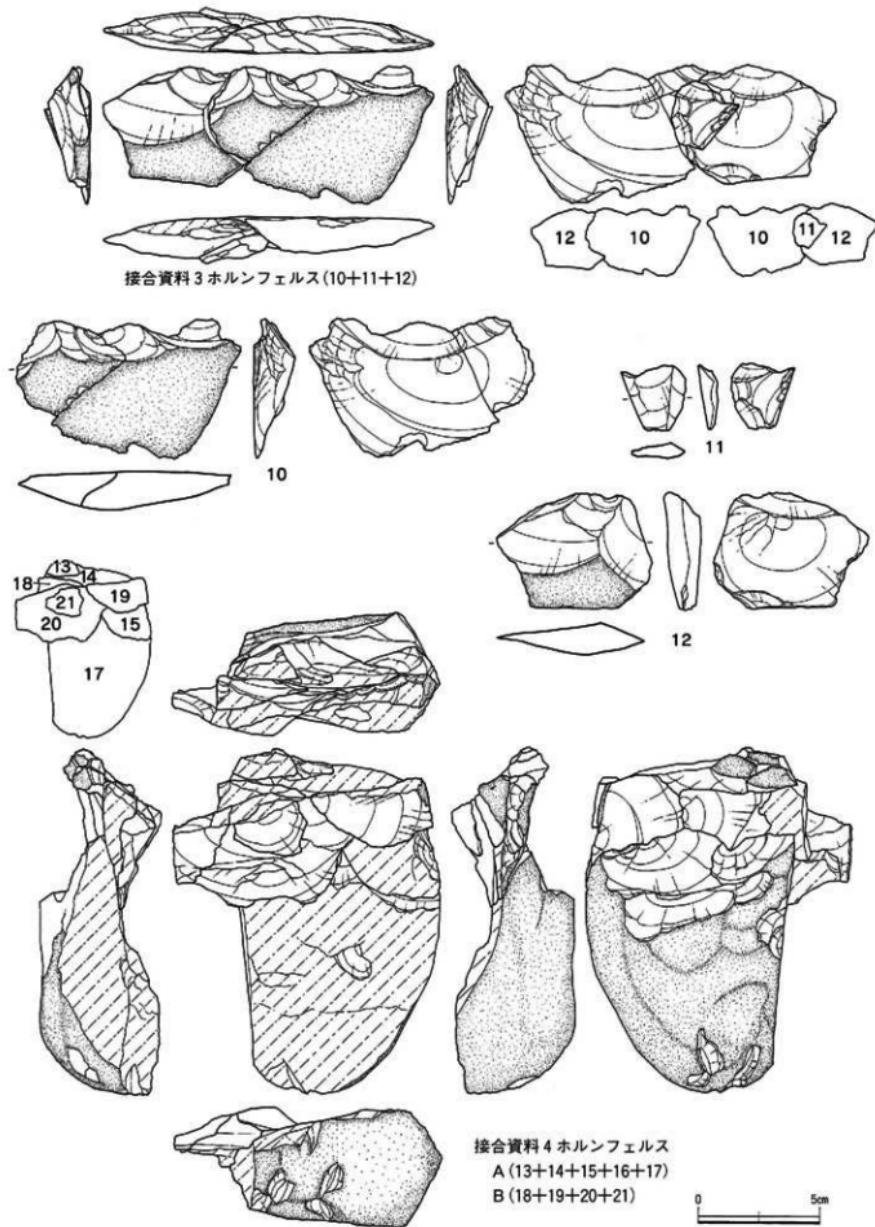


0 5cm

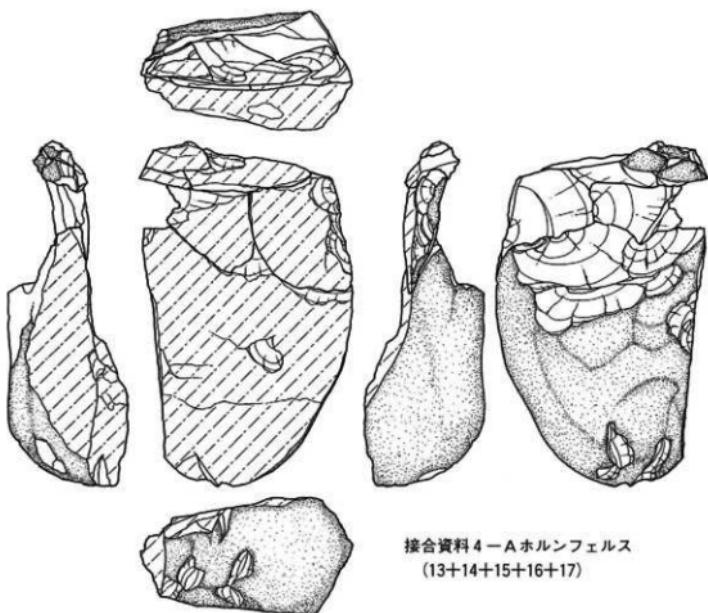
第36図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図1 (ホルンフェルス S=1/2)



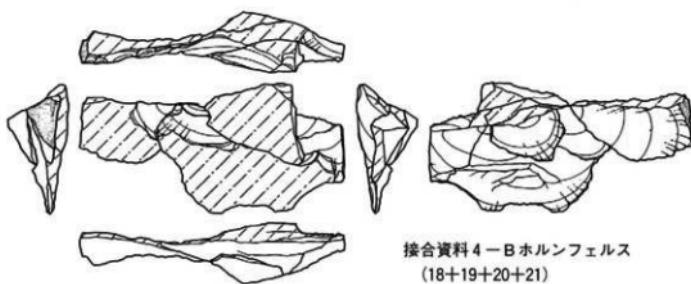
第37図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図2 (ホルンフェルス S=1/2)



第38図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図3 (ホルンフェルス S=1/2)



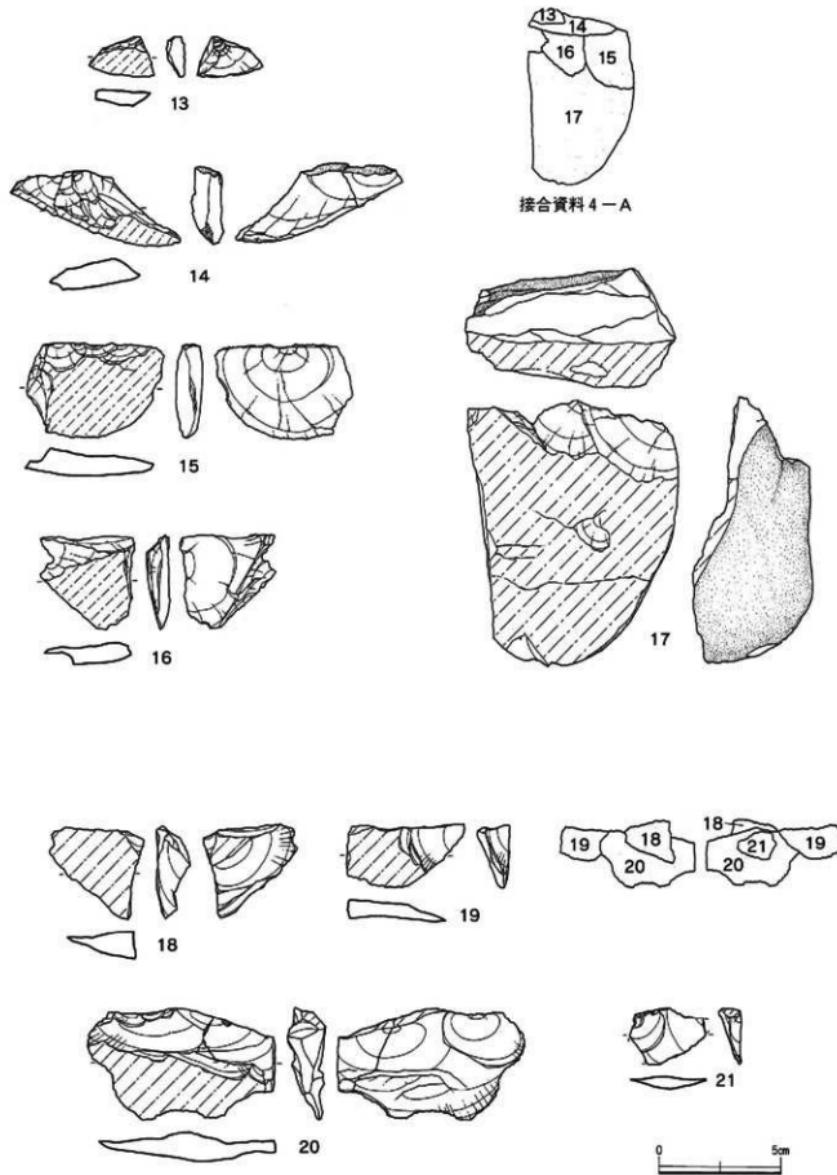
接合資料 4-A ホルンフェルス
(13+14+15+16+17)



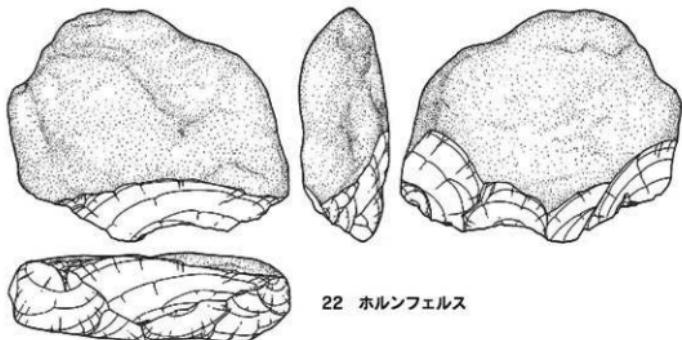
接合資料 4-B ホルンフェルス
(18+19+20+21)



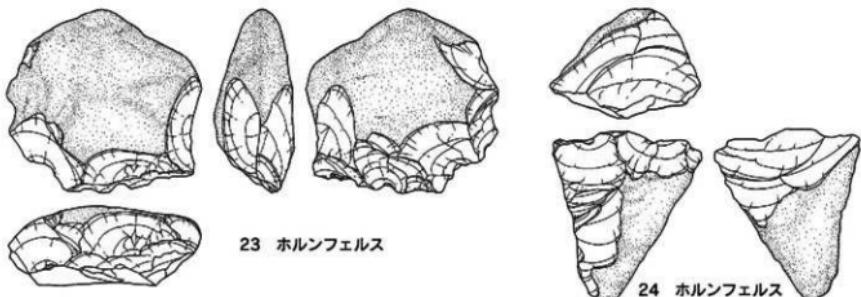
第39図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図4 (ホルンフェルス S=1/2)



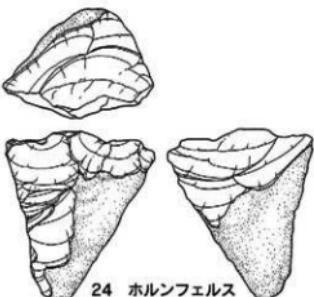
第40図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図5 (ホルンフェルス S=1/2)



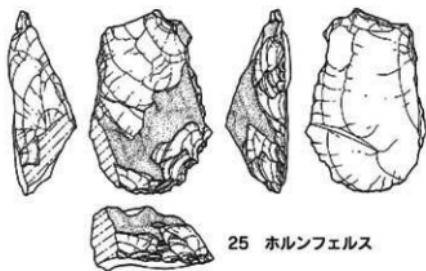
22 ホルンフェルス



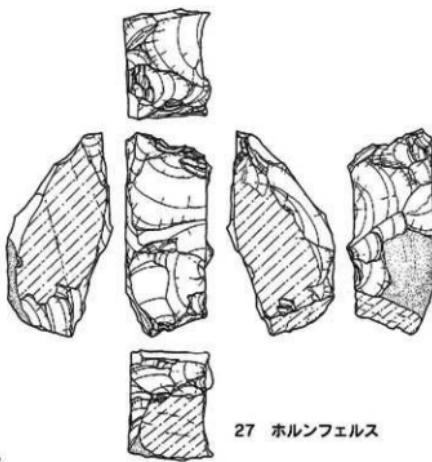
23 ホルンフェルス



24 ホルンフェルス



25 ホルンフェルス



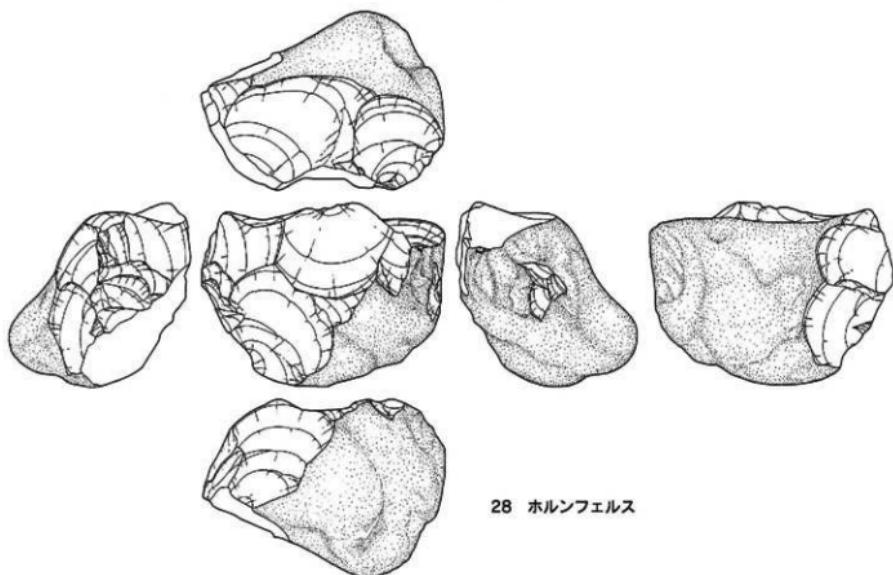
26 ホルンフェルス



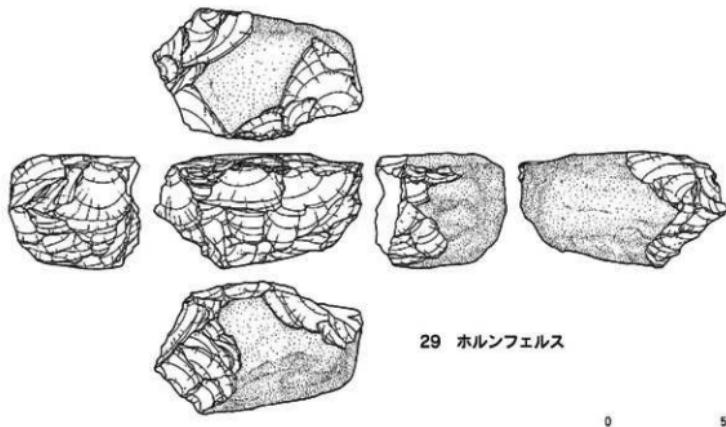
27 ホルンフェルス

0 5cm

第41図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図6 (ホルンフェルス S=1/2)

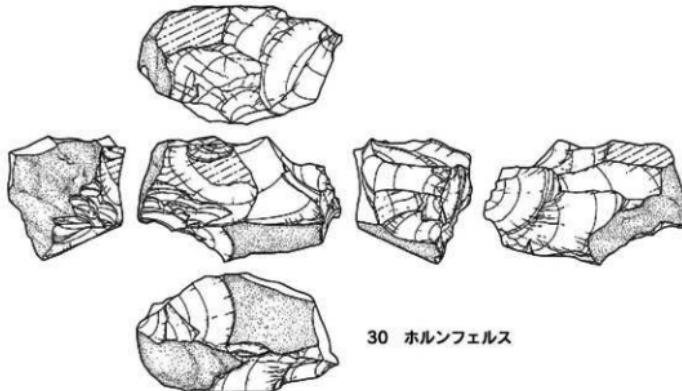


28 ホルンフェルス

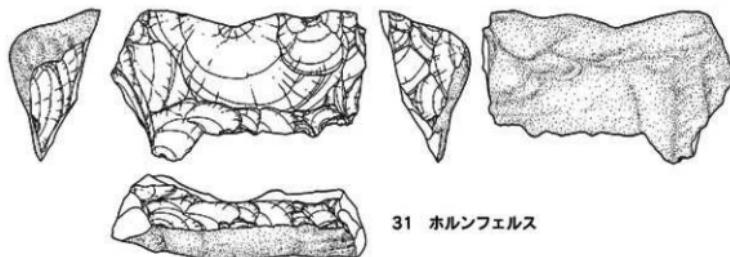


29 ホルンフェルス

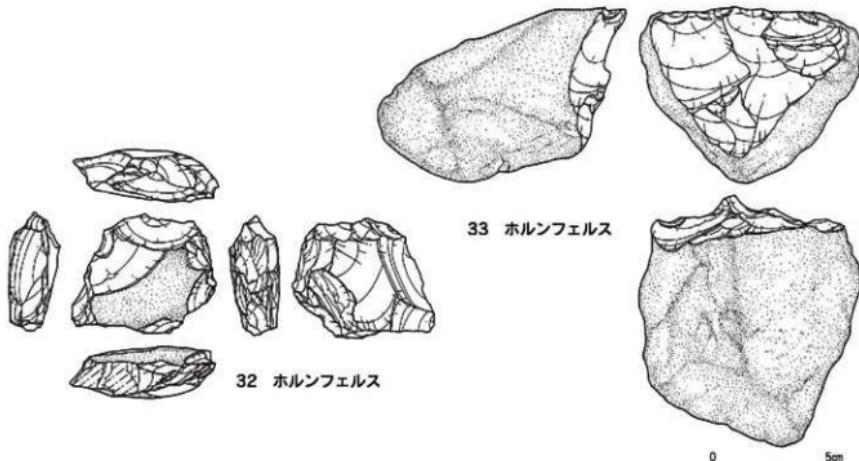
0 5cm



30 ホルンフェルス

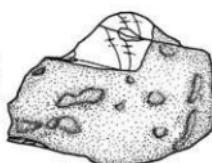
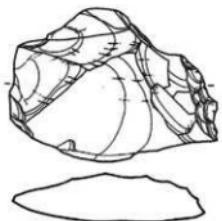


31 ホルンフェルス



33 ホルンフェルス

第43図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図8 (ホルンフェルス S=1/2)



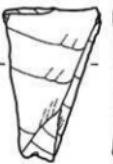
34 ホルンフェルス



35 ホルンフェルス



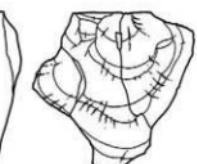
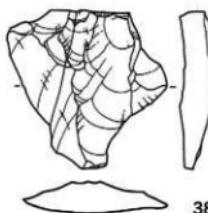
36 ホルンフェルス



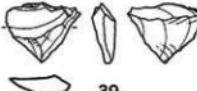
37 ホルンフェルス



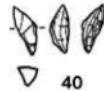
37 ホルンフェルス



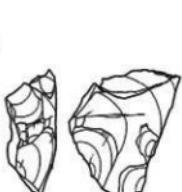
38 ホルンフェルス



39



▽ 40



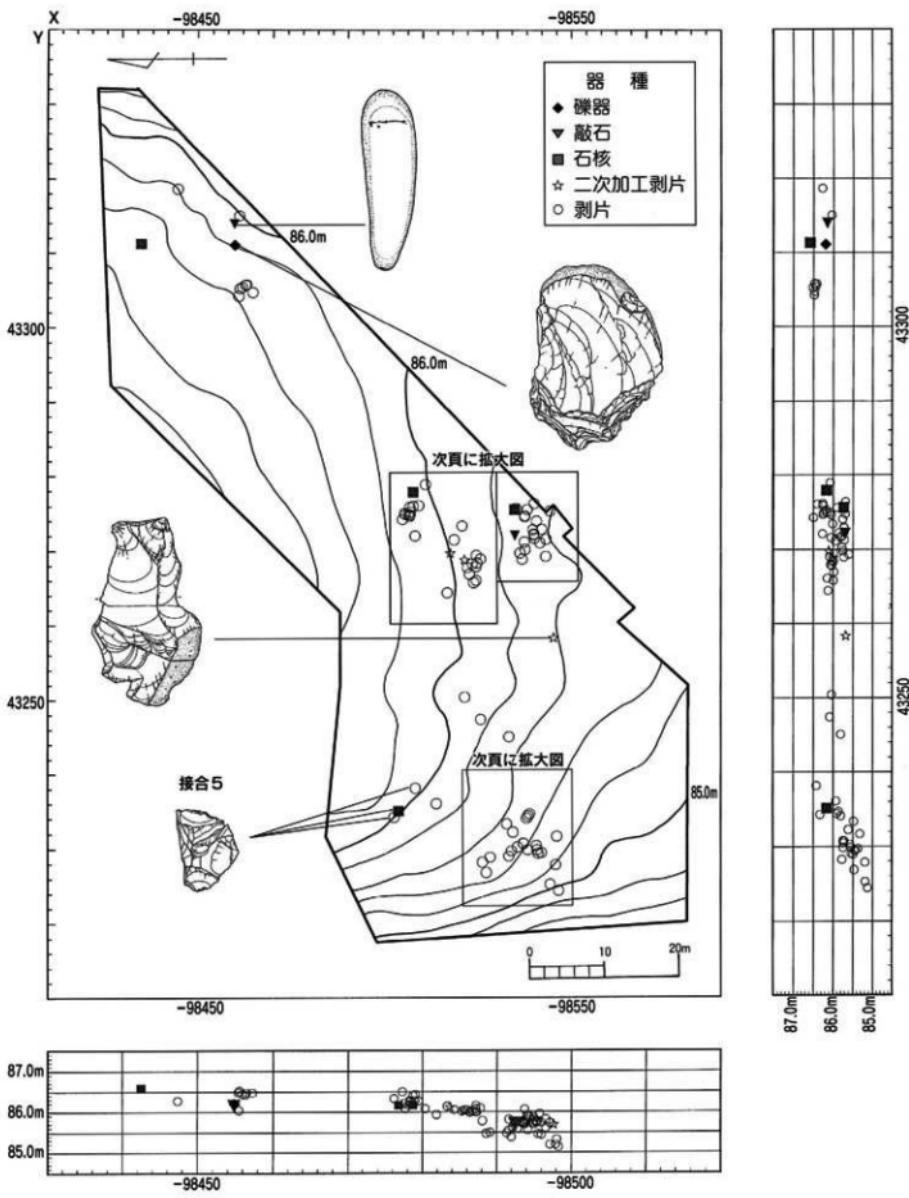
接合資料5 貝岩
(39+40+41)



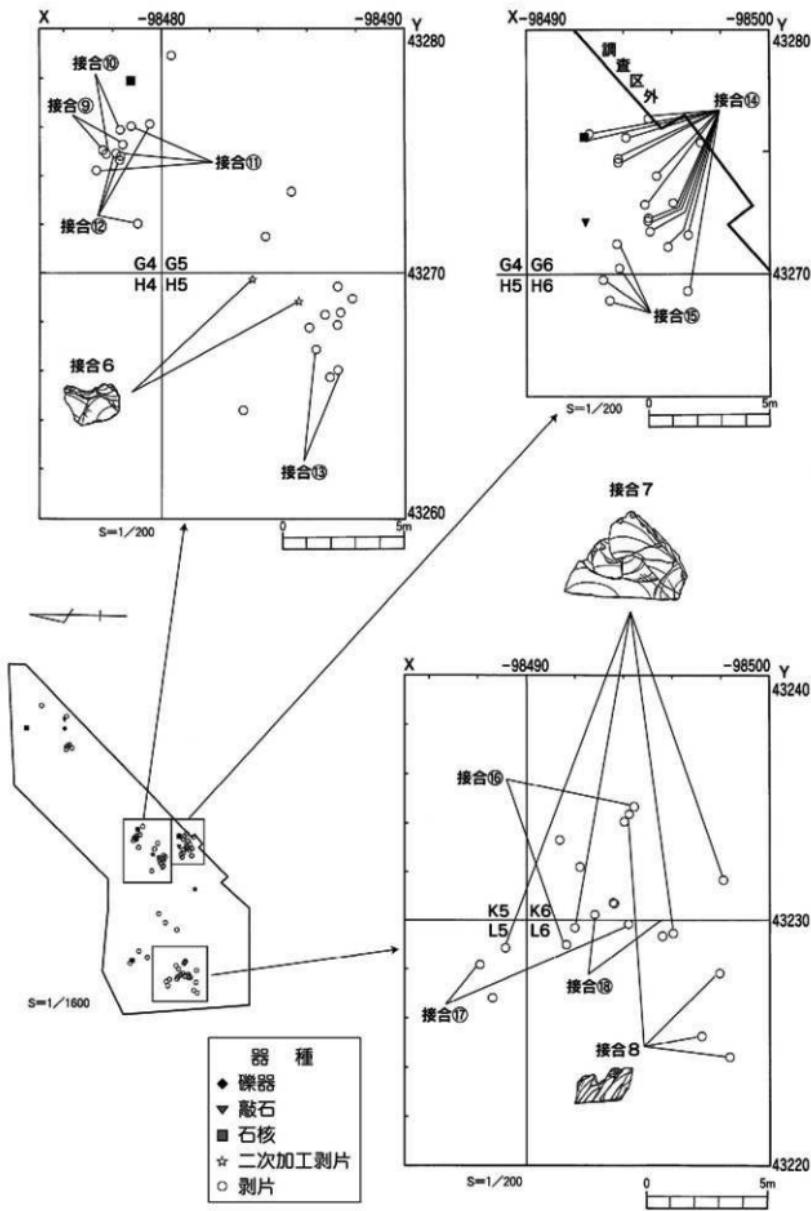
41



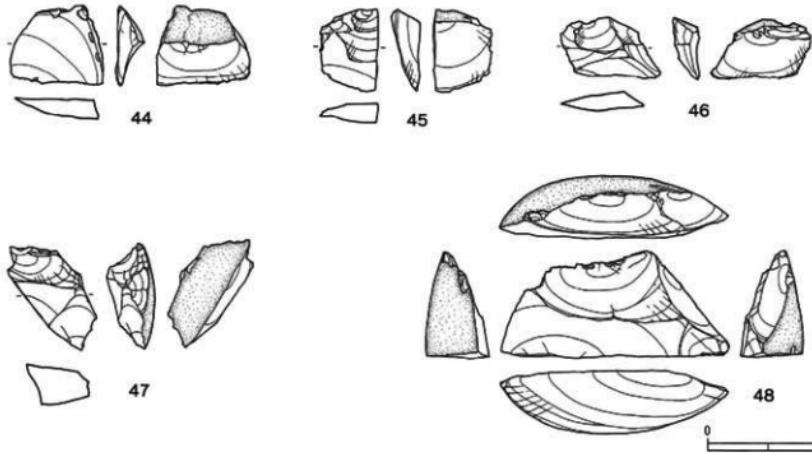
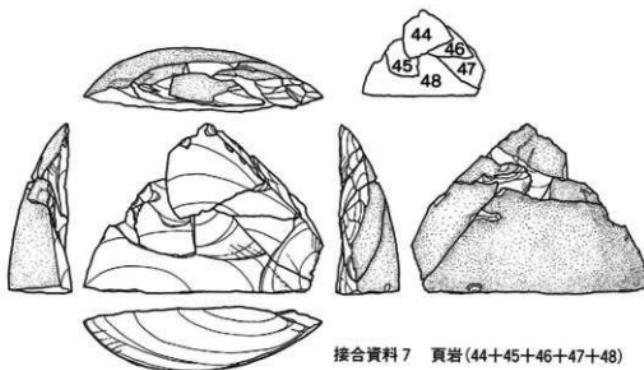
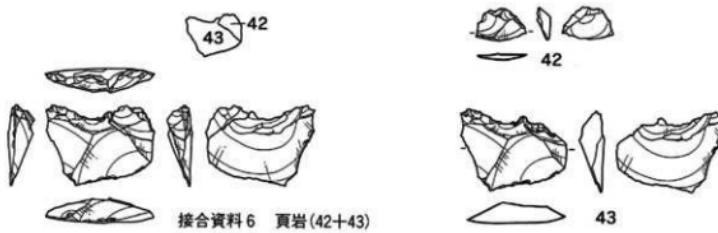
第44図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図9 (ホルンフェルス・貝岩 S=1/2)



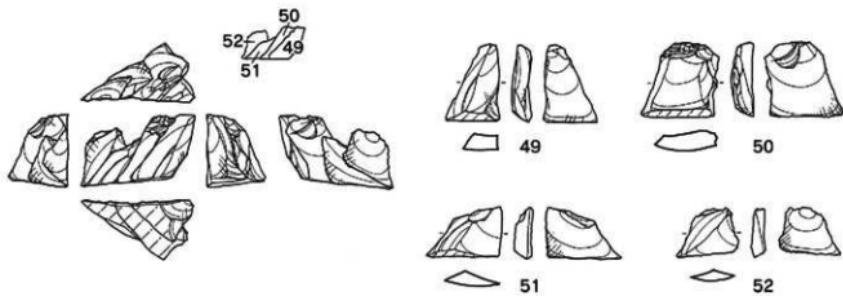
第45図 旧石器時代第Ⅰ文化層　頁岩製石器分布図1 (S = 1 / 650)



第46図 旧石器時代第Ⅰ文化層 页岩製石器分布図2 (S = 1 / 650)

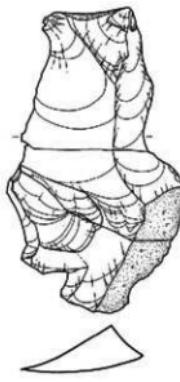
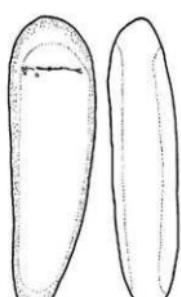
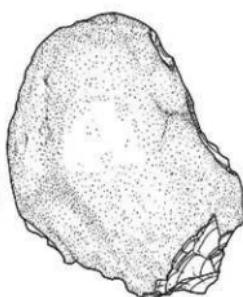
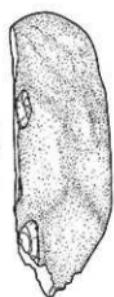
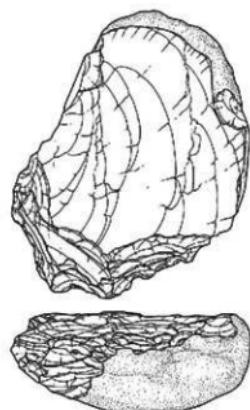


第47図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図10 (頁岩 S=1/2)

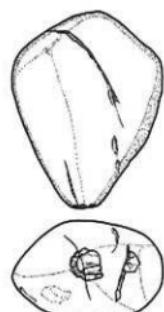


53 真岩

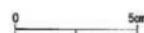
54 真岩



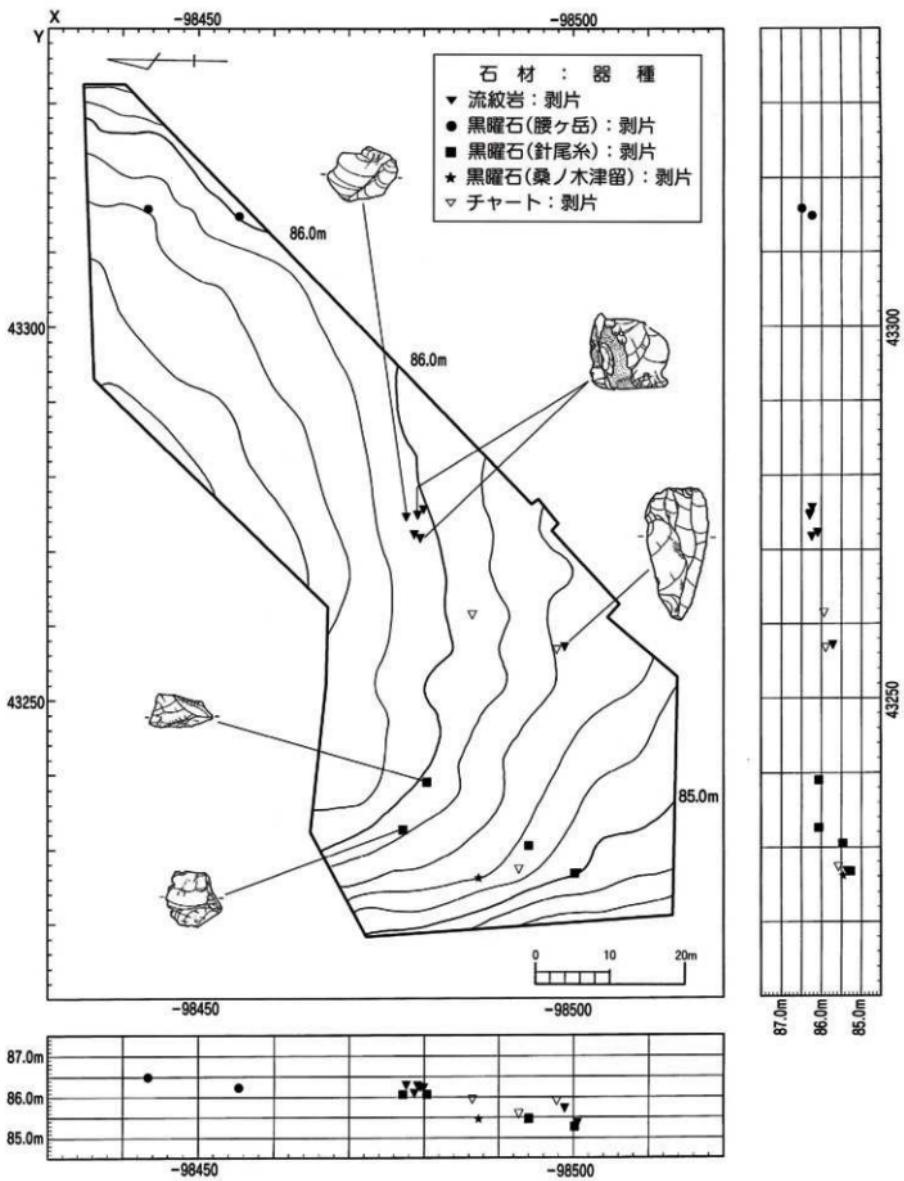
55 真岩



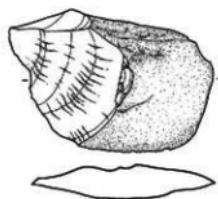
56 真岩



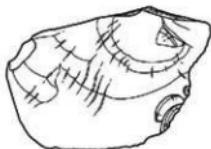
第48図 旧石器時代第I文化層 石器実測図11 (真岩 S=1/2)



第49図 旧石器時代第Ⅰ文化層 流紋岩・黒曜石・チャート製石器分布図 (S = 1 / 650)



57



58



59



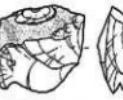
60



接合資料9 流紋岩(59+60)



59



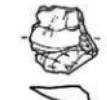
60



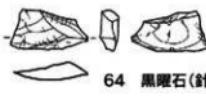
61 流紋岩



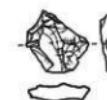
62 流紋岩



63 黑曜石(針尾)



64 黑曜石(針尾)



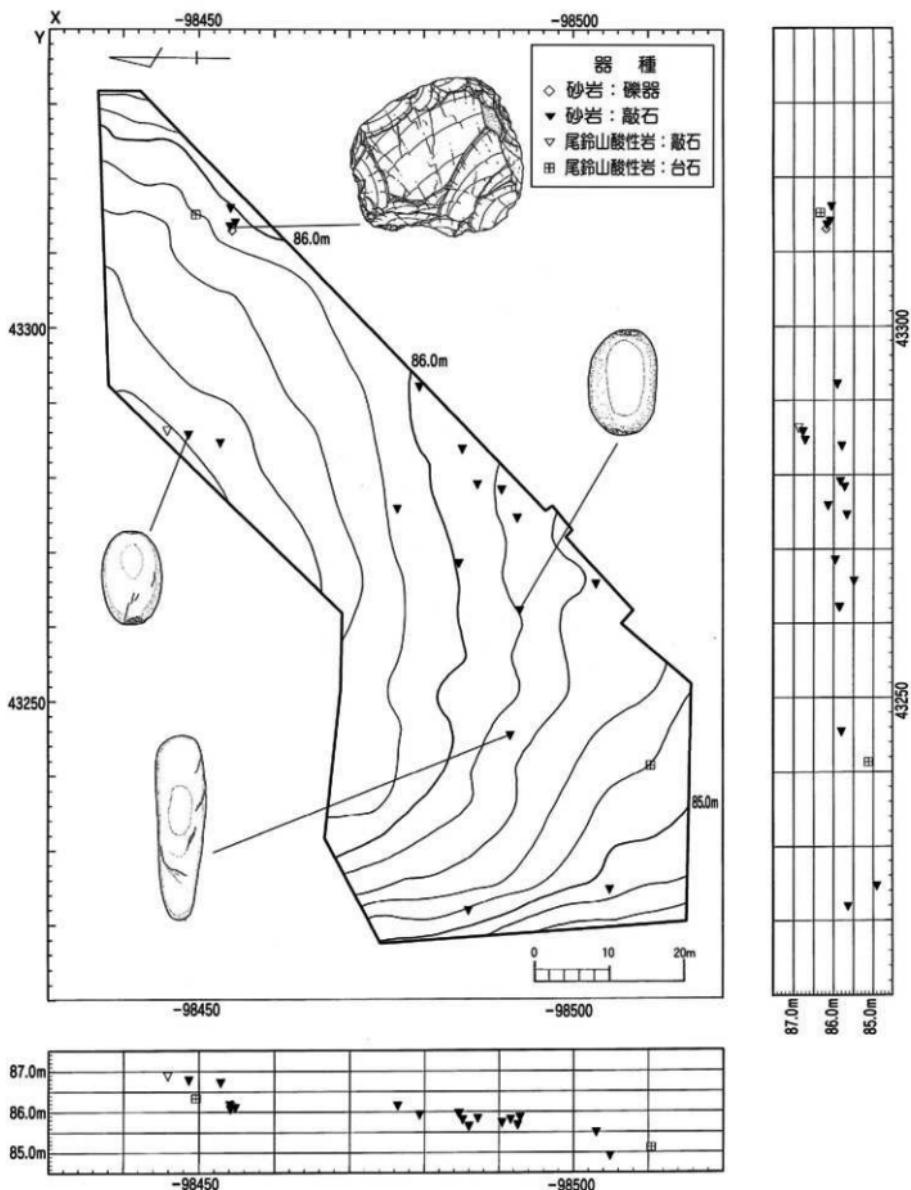
65 黑曜石(針尾)



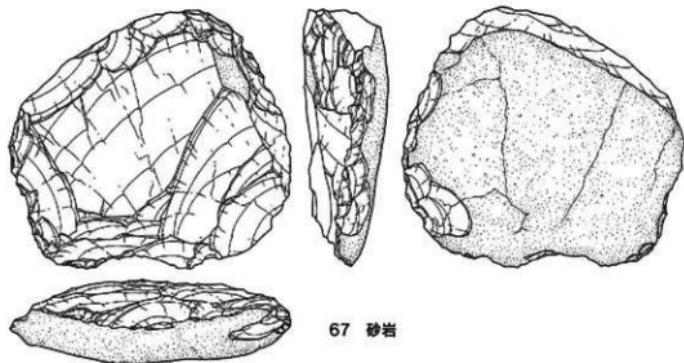
66 黑曜石(針尾)

0 5cm

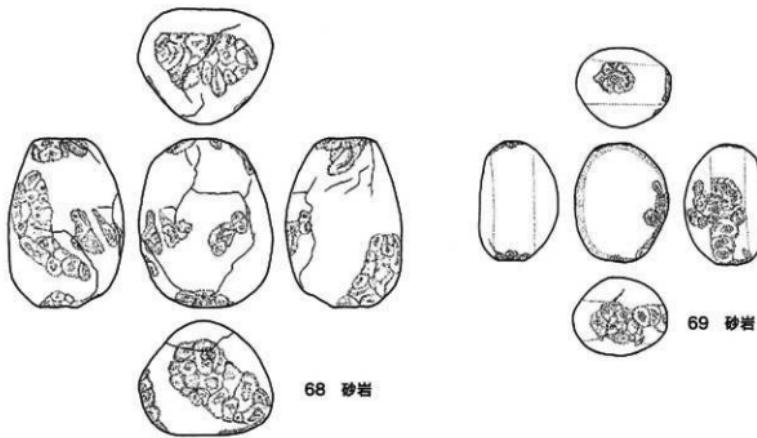
第50圖 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図12 (頁岩・流紋岩・黒曜石 S=1/2)



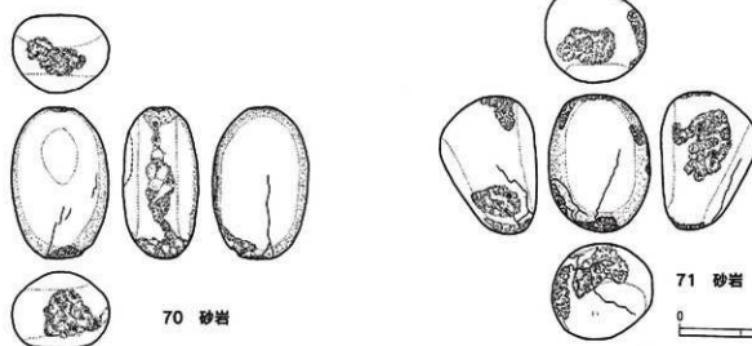
第51図 旧石器時代第Ⅰ文化層 砂岩・尾鈴山酸性岩類製石器分布図 (S = 1 / 650)



67 砂岩



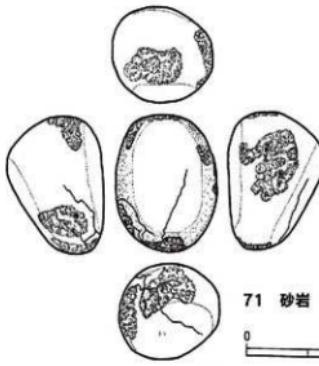
68 砂岩



69 砂岩



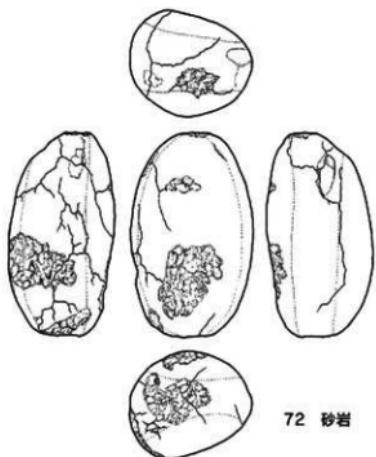
70 砂岩



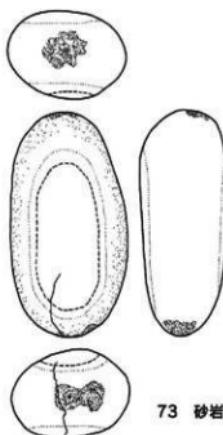
71 砂岩

0 5cm

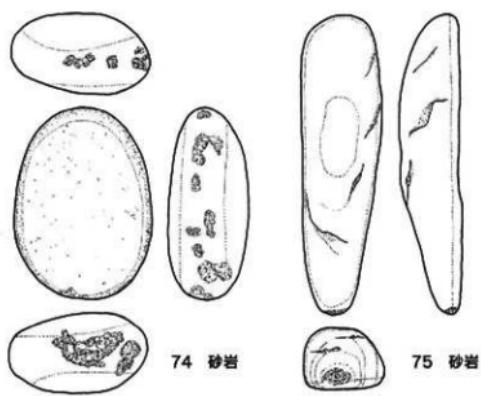
第52図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図13（砂岩 S=1/2）



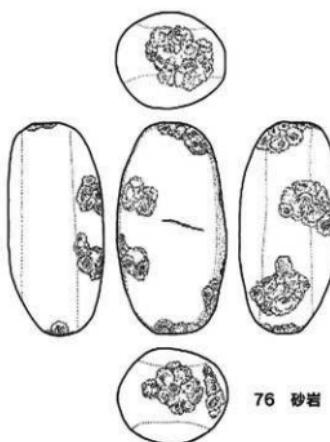
72 砂岩



73 砂岩



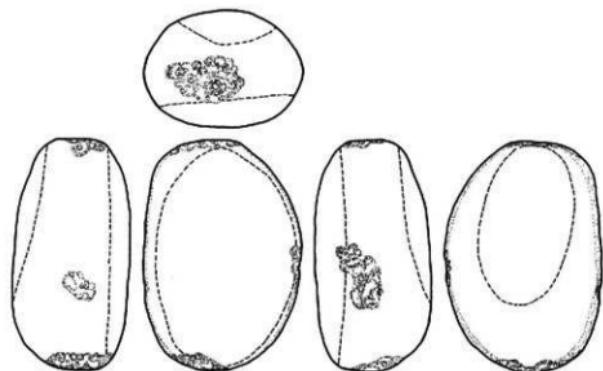
74 砂岩



75 砂岩

0 5cm

第53図 旧石器時代第Ⅰ文化層 石器実測図14（砂岩 S=1/2）

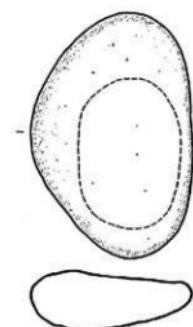


77 尾鈴山酸性岩

0 5cm



78 尾鈴山酸性岩



79 尾鈴山酸性岩

0 10cm

の主要是栗面を背面に取り込んだ有底剥片となっている。

接合資料8（第48図49～52）

4枚の剥片からなる。49が縦長である以外は幅広・不定形剥片である。また、52以外は全て有底剥片である。

非接合資料（第48図53、第50図57・58）

53は両刃標器である。節理に沿って割れる石質で、石核とは考えにくい。

54は敲石の可能性がある砾である。棒状砾の尖り気味の一端にわずかに敲打痕が認められる。

55は剥片である。砾面を打面とし、打面・作業面調整は観察されない。

56は敲石である。図では観察できないが、上端にも敲打痕が認められる。下端には節理面に切られる敲打痕が認められる。

57・58は剥片である。

C 流紋岩製の石器

接合資料9（第50図59・60）

剥片2枚の接合である。59は打面作出の際の石核調整剥片である。59を剥いだのち、60の幅広剥片を剥いでいる。

非接合資料（第50図61・62）

61は石刃である。打面調整がわずかに認められる。

62は幅広剥片である。肉眼の特徴から接合資料9と同一母岩の可能性がある。

D 黒曜石製の石器

非接合資料（第50図63～66）

いずれも剥片で、肉眼の特徴が西北九州針尾産黒曜石に類似する。

E 砂岩製の石器

非接合資料（第52図、第53図）

67は片刃標器である。砂岩としたが若干変成している。ホルンフェルスあるいは頁岩の可能性もある。

53と同様、節理面に沿って割れやすい石質であることから、石核とは考えにくい。

68～76は敲石である。長軸の一端または両端に敲打痕を残すのが基本だが、72のように平坦面や、側縁部に敲打痕を持つ資料もみられる。また、73は表裏の平坦面の手触りが滑らかで、磨り面の可能性も

指摘できる。

F 尾鈴山酸性岩類製の石器

非接合資料（第54図）

77は敲石である。78・79は台石の可能性がある砾である。

（4）小結

本文化層の石器群の特徴を次に列挙しておく。

石材利用面では、足下のホルンフェルスや頁岩を多用する傾向が認められる。逆に遠隔地石材である黒曜石はわずかに存在するのみである。

技術面では、幅広・不定形剥片の生産が目立つ。この際には多様な技術が適用されるが、とりわけ次の二つの技術が注目される。ひとつは、およそ掌大の原石を石核素材とし、乏しい石核調整のみ施したものである（接合資料1・4、28など）。打面は砾面や剥離面など様々で、対応する残核形態も多様と考えられる。ふたつには、剥片を素材とした石核を伴うものである。サイズには大（接合資料7）小（接合資料6）いずれも描う。注目したいのは、接合資料7で、石核素材となった剥片の主要剥離面を背面に取り込む有底剥片を生産している。

残された資料にはこれらの二つの技術的様相が濃厚に汲み取れるが、一方で第三の技術の存在も窺える。35や61にみる石刃技法的様相がそれである。

組成の面からは、さしあたり当該石器群に限って言えば、ナイフ形石器・台形（様）石器の不在、砾器の卓越傾向を指摘できる。これに搔器などが少量加わる。なお、砾器の一部は石核として使用された可能性があるが、その場合はさきにみた掌大の原石を素材とする剥片剥離工程との共通性を評価できよう。宮崎県旧石器文化談話会による編年では第1段階の石器群に比定できる。

4 旧石器時代第Ⅱ文化層の遺構と遺物

(1) 概要

第Ⅱ文化層は、基本層序のV a層(MB 2)を中心とする遺構・遺物が検出された。調査区北東部と南西部の大きく二つの遺構・遺物分布のまとまりが認められる。北東部に1基、南西部に3基の礫群を認定した。遺物は総数106点で、内訳はトゥールが11点、剥片・石核が95点である。

(2) 遺構

S I 13 (第58図)

調査区北東部のV a層(MB 2)で検出。礫群の範囲は東西に長く、長径が約3m、短径が約1m。礫の密集度は散漫で、地形は東に向かうほど緩やかに下る。礫の総数は17個と少ない。尾鉛山酸性岩類、砂岩、ホルンフェルスがほぼ同じ割合で、頁岩が1個である。礫群内で2組(5個)、礫群外の礫と2組(10個)が接合している。

礫群内において石器21点(石核1、剥片20)を検出した。

S I 14 (第59図)

調査区南部のV a層(MB 2)で検出。礫群の範囲は、長径が約6.5m、短径が約1.5mであるが、同層の他の礫群に比べると広い。礫の密集度は散漫であるが、調査区の東側境界付近まで分布していることから、礫群は調査区外南東北側にも拡がっていると推測される。礫の総数は47個である。砂岩が40%(19個)、ホルンフェルスが28%(13個)を占める。礫群内で2組(4個)接合しているが、礫群外とは接合していない。

礫群内において石器2点(台石2)を検出した。

S I 15 (第60図)

調査区南西部のV a層(MB 2)で検出。礫群の範囲は、長径が約3.5m、短径が約2.5mである。礫の密集度は散漫であり、S I 16が南西に隣接する。

礫の総数は17個で少ない。砂岩が59%(10個)、ホルンフェルスが29%(5個)を占める。礫群内で2組(4個)接合しているが、礫群外とは接合していない。

礫群内において石器1点(礫器)を検出した。

S I 16 (第61図)

調査区南西部のV a層(MB 2)で検出。礫群の範囲は、長径が約2m、短径が約1.5mである。礫の密集度は散漫であり、S I 15が北東に隣接する。地形は南西に向かうほど緩やかに下る。

礫の総数は9個で少ない。砂岩が6個、ホルンフェルスが3個である。礫群内で1組(5個)接合しているが、礫群外とは接合していない。

礫群内において石器1点(敲石)を検出した。

(3) 遺物

A ホルンフェルス製の石器

接合資料10 (第66図80・81)

礫の端から剥片剝離をおこなっている。打面も末端も礫面であり、この長さの剥片を狙った可能性がある。

接合資料11 (第66図82~84)

やや節理に影響を受けた剥離面が認められる。打面・作業面調整は施されない。

接合資料12 (第67図85・86)・13 (第67図87~89)

接合資料12は小形の縱長剥片を指向したものか。打面・作業面調整は施されない。接合資料も同様の剥片剝離工程の打面再生剥片と剥片の接合である。
非接合資料 (第67図90、第71図91~93)

90は両刃礫器である。堆積岩起源のホルンフェルスであろうか、やや節理面に沿った剥離傾向が認められる。91は二次加工剥片、92・93は幅広・不定形剥片である。

B 頁岩製の石器 (第71図94~98)

非接合資料

94・95は石核である。96はナイフ形石器である。両側縁にプランティングが施されている。先端を折損。97は幅広剥片、98は縱長剥片である。

C 流紋岩製の石器 (第71図99・100)

非接合資料

99は削器か。周縁にプランティングにも似た加工を施す。正面図左下がやや尖鋸に仕上げられており、錐状石器である可能性も残す。

100は二次加工剥片である。剥片末端部に急角度の搔器的な二次加工痕が観察される。

第6表 旧石器時代第II文化層の石器・石材組成

	ナイフ形石器	刮器・搔器	礫器	石核	R.f.	剥片	敲石	台石	計
ホルンフェルス			1	3	1	47			52
頁岩	1			2		37			40
流紋岩		1			1	2			4
黒曜石						2			2
チャート						2			2
砂岩							4	1	5
尾鈴山酸性岩類								1	1
計	1	1	1	5	2	90	4	2	106

D 緑色珪質岩製の石器（第71図101）

非接合資料

小形の幅広剥片である。

E 砂岩製の石器（第72図102～107）

非接合資料

102～105は敲石である。102は使用痕が不明瞭であるが形状から可能性を考慮した。103は敲打痕が明瞭ではないが、両端にやや滑らかな平坦面が形成されている。105は明らかな敲打痕が観察される。

106・107は台石の可能性が考えられる礫である。

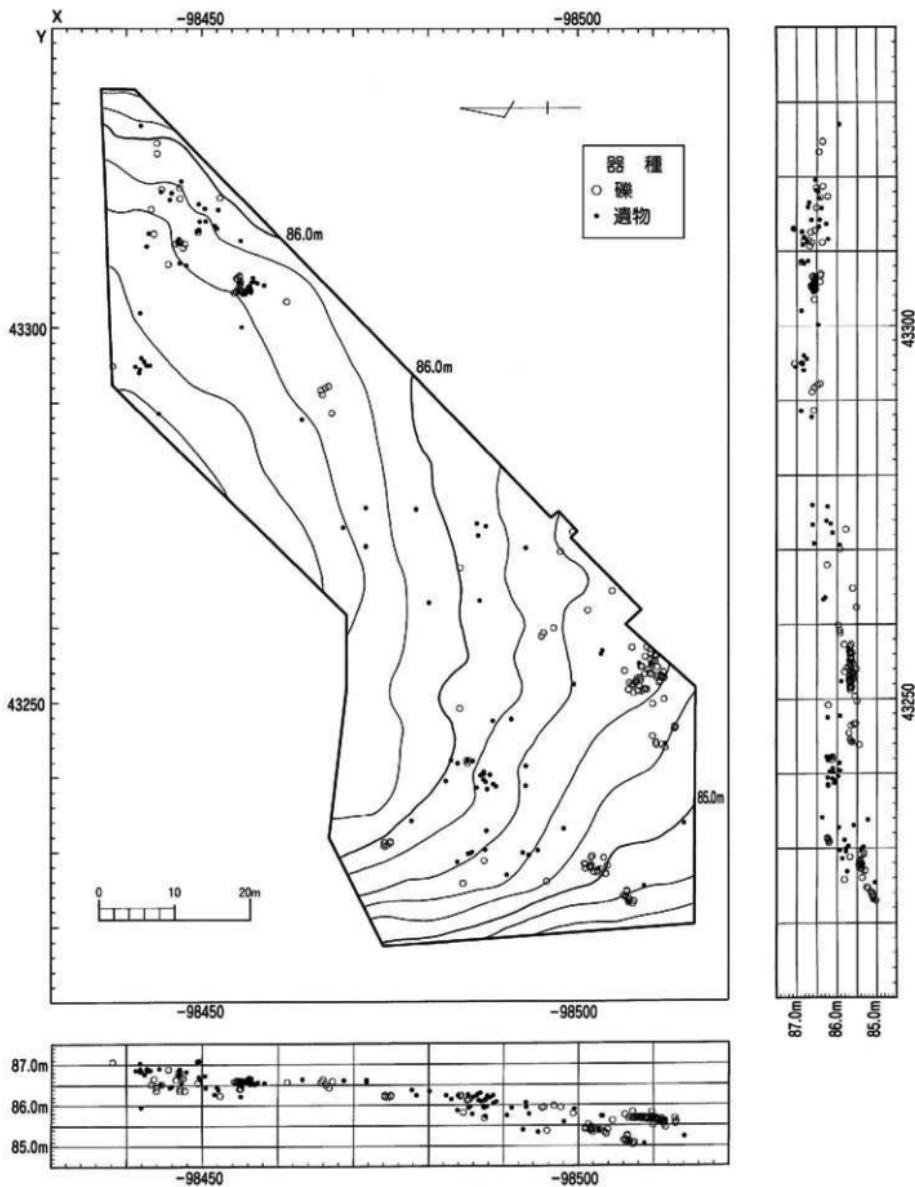
106には数箇所に凹凸が観察される。

(4) 小結

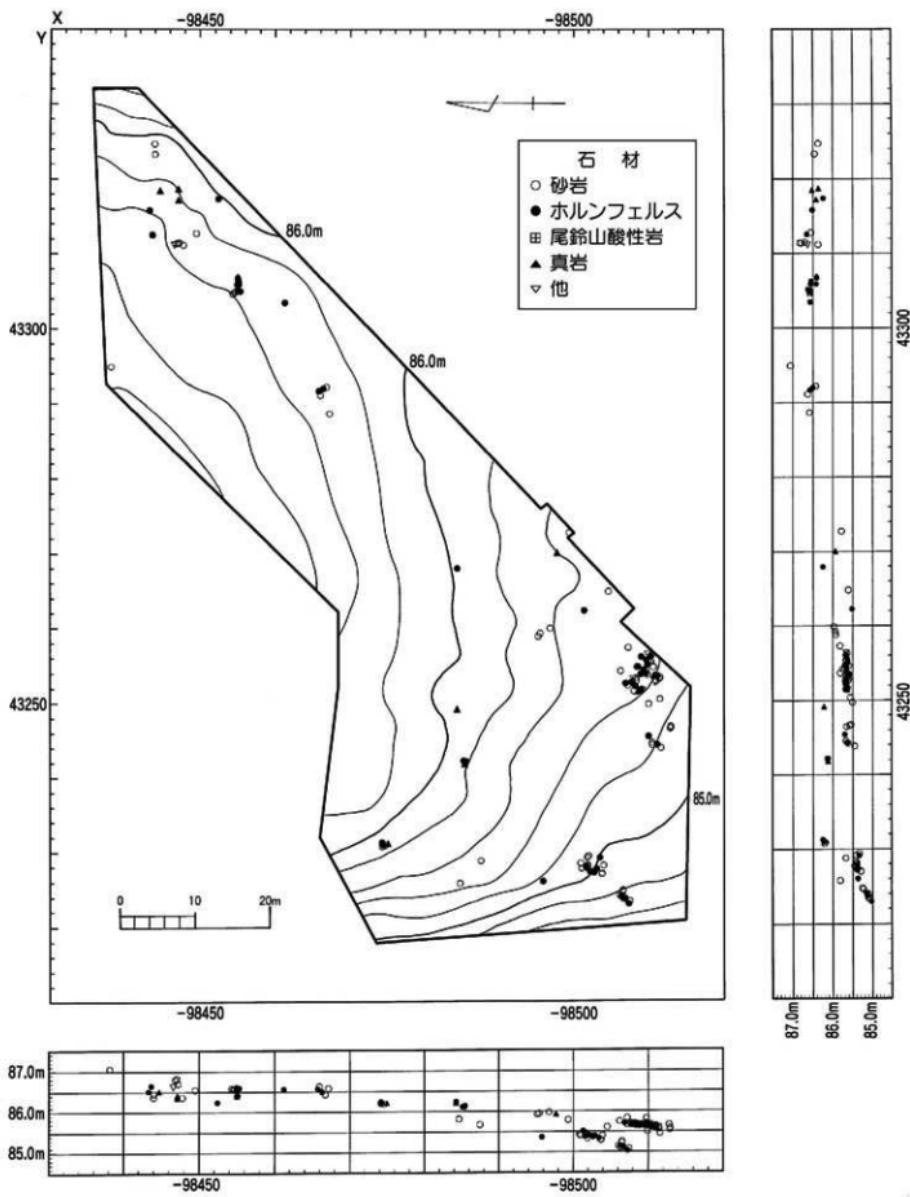
本文化層の石器群はトゥールの組成に乏しいが、次のような特徴が挙げられる。

小形のナイフ形石器（96）を組成する。併せて当該ナイフ形石器と対応する可能性がある接合資料（接合資料12・13）や石核（94）がみられる。

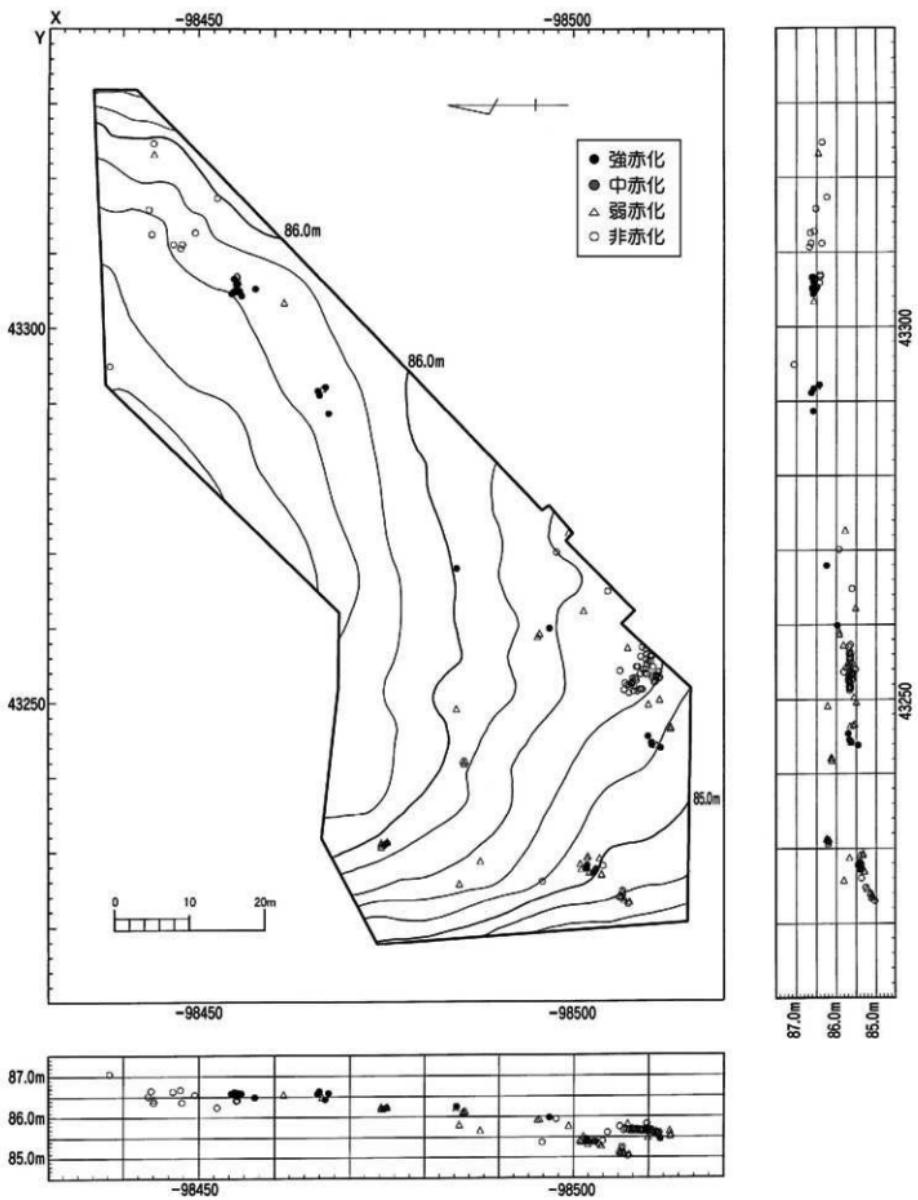
上述の要素と出土層位を考え合わせると、本文化層は宮崎県旧石器文化談話会による編年では第3段階の石器群を含む可能性が高い。礫器などの存在も考慮すると第2文化層を含む先行時期の石器群が混在する可能性も排除できない。



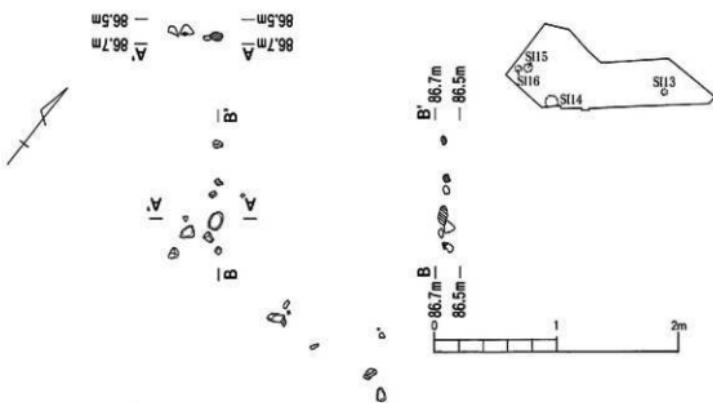
第55図 旧石器時代第Ⅱ文化層 遺構・遺物分布図 ($S = 1 / 650$)



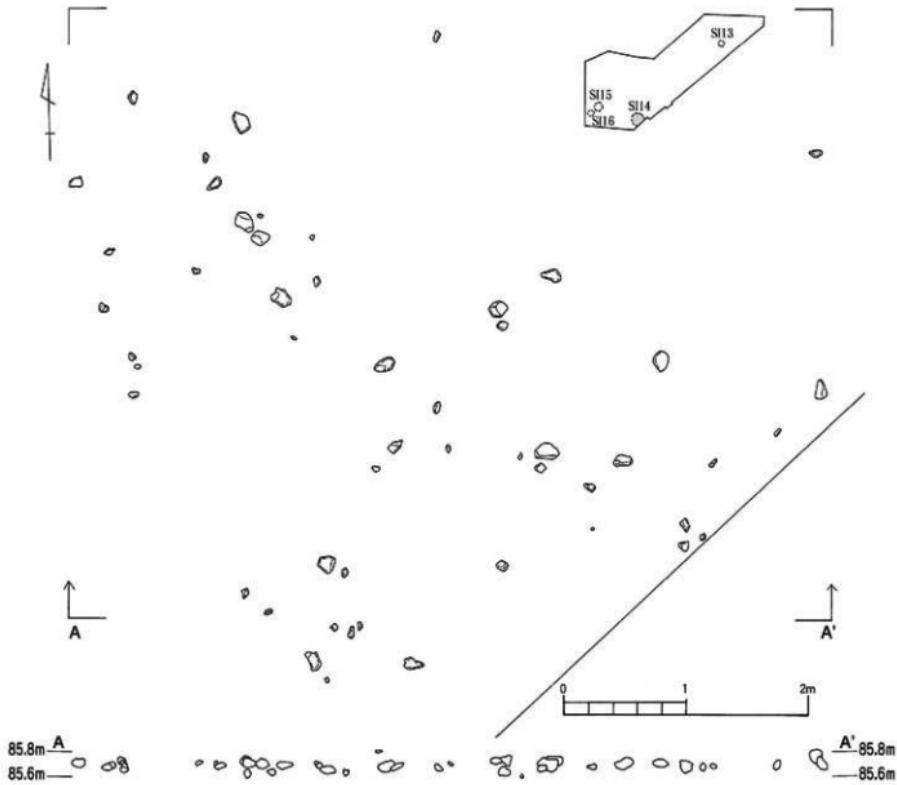
第56図 旧石器時代第Ⅱ文化層 石材別礫分布図 ($S = 1 / 650$)



第57図 旧石器時代第Ⅱ文化層 赤化度別礫分布図 ($S = 1/650$)



第58図 旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 13実測図 (S = 1 / 40)



第59図 旧石器時代第Ⅱ文化層 S I 14実測図 (S = 1 / 40)